
藪鬼探偵事務所

masa-KY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藪鬼探偵事務所

【Nコード】

N4906Y

【作者名】

m a s a - K Y

【あらすじ】

女子高生の家出人搜索と、それに絡んだ殺人事件の真相を暴くため、私立探偵の藪鬼寛樹が活躍する探偵ドラマ。

登場人物（前書き）

制作：2003年5月

改訂：2011年11月

登場人物

やぶきひろき
藪鬼寛樹

東京都某所にある「藪鬼探偵事務所」の所長。

二十歳の頃から大学に通いながら探偵事務所に勤務し、探偵家業という日の目を浴びない商売のノウハウを学び、二四歳のときに独立、現在に至る。

趣味は麻雀とタバコを吸うこと。見た目は無節操でだらしく見えるが、事件を前にすると、鋭い洞察力と持ち前の推理力であらゆる事件を解決する優れ者。

現在、事務所で寝泊りする二八歳独身で、家事洗濯掃除をしてくれる女性を募集している。

なわきこい
佐和鏡子

「藪鬼探偵事務所」に務める二四歳のキャリアウーマン。主に総務経理業務を担当。

性格は竹を割ったようにサッパリしており、常に冷静沈着で、真つ直ぐな行動にポリシーを持っている。

いつも無鉄砲に行動する藪鬼の監視役として、毎日気を遣いながら書類整理に追われている。

趣味はパソコン。毎日インターネット上の掲示板やチャットにはまっているサイバーな女性。

しげのたくまる
繁野琢丸

警視庁捜査一課に勤務する現職の刑事。ちなみに階級は巡査部長。自らの捜査に信念を持っているためか、捜査の邪魔となる探偵業を執拗に嫌う。そのためか藪鬼とは犬猿の仲だ。しかし、犯罪解決のために、藪鬼とは非合法な情報取引を行うこともある。

妻一人、子供二人と幸せな家庭を持つ四三歳のいいお父さんでも

ある。

さくらすけとも
佐倉助智

東京都某所にある「高笠寺」に身を置く二七歳の若き住職。

あらゆる業界の葬儀や法事に顔を出しているおかげで、裏情報に
関してはかなりの事情通である。

かの昔、ある犯罪で藪鬼に助けられてから情報収集の手伝いをし
ている。

趣味は筋力トレーニング、基礎体力作り。毎日お経を読みながら
一五kgの鉄アレイを持ち上げているボディビルダーだ。

プロローグ

俺はタバコに火を灯した。

「ふうー……。」

今夜のタバコは、昨夜のものに比べると不思議なほどうまく感じる。

それもそのはずだ。数日間にも及んだ家出人搜索依頼に、ようやくケリがついたからだ。

さすがの俺も、今回の調査は手を焼いた。何せ、ただの家出人搜索のはずが、殺人事件にまで関わってしまったのだからな。この世の中、まったくどうなっているのやら。

ここは東京都某所、十五階建て雑居ビルの十階にある探偵事務所だ。ブラインドを上げた窓には、遠景ながらも光るネオンが、この俺の疲れた目にまぶしく映っている。

「さてと、そろそろ寝るとするか。」

俺は就寝のため、事務所の中にある私室へと向かう。

そんな俺の目に、ソファーに置いてある赤いファイルが視界に入った。それは、今回の調査結果をまとめた報告書が綴じてあるファイルだ。

俺はおもむろに、その赤いファイルを手にして、調査報告書を一枚一枚めくってみた。

どっかりとソファーに腰掛けた俺は、胸ポケットからタバコを一本取り出し、そして、お気に入りのジッポライターから揺らぐ炎を目の前に熾す。

「ふうー……。」

調査報告書を丁寧にめくりながら、俺は眠ることも忘れて、今回の調査依頼のすべてを思い起こしていた。

＊ ＊

『コンコン・・・』

何者かが、俺の私室のドアをノックしている。やさしく、しかもリズムカルなノックだ。

これは間違いない、彼女がやってきたようだ。

俺は重たいまぶたをこじ開けると、凍りついたような固い上半身を起こした。

「もう朝か・・・。」

私室の窓を覆うカーテンの隙間から、暖かい日差しが差し込んでいる。

季節は春だ。その日差しはあまりにも穏やかで、淀んでいた俺の私室に心地よい息吹を送り込んでいる。

そんな春の陽気を全身で受け止めながら、俺は私室のドアをゆっくりと開けた。

「おはようございます。先生。」

俺にキチンと朝のあいさつをするこの女性、今朝もクールな視線を送っている助手の鏡子くんだ。

肩まで伸ばした艶のある髪、薄めの桜色したリップ、そして、仕事をテキパキこなしそうなインテリメガネ。彼女の印象はざっとこんなところだ。

彼女の仕事は、主に総務経理業務を担当してもらっている。もう一つ付け加えるとしたら、事務所内の整理整頓もある。

この事務所のカーペットや書棚の隅々がきれいなのは、言うまでもなく彼女のおかげなのである。

俺はここ最近、彼女の声で目覚めることが多くなってきた。傍目で見たら、俺達二人は怪しい男女関係も想像されてしまいそうだが、実際のところは・・・。

「ああ、おはよう。鏡子くん。いつになく早いご出勤だね。さては、夜八時には消灯ってヤツかい？」

「コーヒー入れておきましたよ。」

俺のお茶目なジョークは、彼女の冷ややかな一言であつという間

にかき消されてしまった。

この白けた雰囲気をはぐらかそうと、俺は乾いた笑みを浮かべつつほろ苦いコーヒーを口につけた。

「先生。つい先ほどですが、女性の方からお電話がありました。調査のご依頼のようでした。」

お目覚めにいきなり仕事の依頼とは・・・。

まあ、ここ東京という街はそう容易くひまを与えてはくれない。

そのおかげで、こんなしがない商売柄の俺でもなんとか生活しているのだが。

「それで、先方はどうすると？」

「はい。今日の午前九時にお見えになるそうです。」

俺は肘つき椅子に腰掛けると、コーヒーを味わいながら、デスクの上にある置時計に目をやった。

アンティークな古い置時計は、今日も正確な時刻を刻んでいた。

「そうか。あと一時間ほどで来るのか。」

コーヒーをグイッと喉に流し込むと、俺は新しい仕事を迎えるために、私室へと舞い戻っていった。

俺は私室にて身支度を整えていた。

依頼人に信頼してもらうには、何よりも、それ相応な姿勢や格好がある。

俺は普段からキッチンとしているわけではないが、依頼人と初対面で折衝するときは、必ずスーツを着用するようにしている。というか、そうしないと鏡子くんが何かとうるさいのだ。

俺はしまっておいた紺のスーツと、犬のプリントをあしらったエンジ色のネクタイをタンスから引っ張り出した。センスはよくないが、いい仕事もらえるようにと、ちょっとした願掛けみたいな理由でこれを選んだ。

「さてと。」

ぼさぼさの髪の毛を直してから、事務所内のデスクに戻った俺は、二杯目のコーヒーをいただきながら朝刊に目を通す。

役立たずばかりの貪欲な政界の記事や、いまいち興味の湧かない芸能界の痴話話をすつ飛ばし、俺は相も変わらず減少の一途を辿らない犯罪記事にばかり目を向けていた。

今朝の朝刊に興味の引く記事はあるだろうか？俺はゆつくりと、新聞の関連記事欄を目でなめ回していた。

「なになに……。牛乳配達員を装い、配達所のヨーグルトを盗んだ男が逮捕。逮捕されたのは、住所不定の飛龍影、三八歳。」

まったく、いい年齢のくせに窃盗とはせこい男だ。俺は呆れたような溜息を漏らした。

「ん？」

俺はある殺人事件の犯罪記事に目が留まった。

「一八歳少年刺殺される……。か。」

その事件の詳細は次のようなものだ。

昨夜九時過ぎ、都内渋谷区のNビル裏で一八歳の少年が胸を鋭利な刃物で刺されて死体で発見された。争った形跡はなく、金品に手をつけていないことから、警察は営利目的の犯行ではなく、何かのトラブルに巻き込まれた可能性があると見ている。

「この少年は生前、渋谷区を中心としたチームに所属しており……。」

『ピンポン……。』

事務所内に呼び鈴の高音が鳴り響いた。これは、何者かが事務所を訪れたことを意味している。

置き時計に目をやると、時刻は九時三分前だった。どうやら、さつき鏡子くんの言っていた依頼人のご登場というところか。

鏡子くんは慌てる素振りもなく、玄関までお迎えに向かった。

俺も手に持っていた新聞を折りたたみ、散らかっている机の上に放り投げた。

「先生、先ほどの方がお見えになりましたので、応接室にお通し

しました。」

この応接室は、事務所から隔離された別室となっている。言うまでもなく、依頼の内容は単純なものから、人に言えないような陰気くさいものまで多岐に渡る。

初対面の依頼人を応接室へ通す理由は、外部に音が漏れない別室であれば、依頼人も心を許して話がしやすくなるという配慮からである。

俺はゆっくりと腰を上げると、気合いを込めるように両腕をグルグル回しながら、依頼人の待つ応接室へと向かった。

『コンコン』

「失礼します。」

俺は会釈しながら、応接室のドアを静かに開ける。

「どうか、よろしく願いますわ。」

俺の目に映った依頼人、年は三十台後半から四十台前半で中肉中背の女性。首からぶら下げているパールのネックレスや、指につけているシルバーの指輪を見る限り、有り余るほどの裕福な生活ぶりが窺い知れる。

彼女の顔色に注目すると、冴えない表情で少し落ち着かない様子だ。はてさて、いったいどんな依頼をしてくるのだろうか？

「ようこそお越しくございました。わたくし、当事務所の所長の藪鬼寛樹と申します。どうぞよろしく願います。」

俺はいつものように、いつも通りの丁寧なあいさつで切り出した。「どうも。」

依頼人は、俺と目を合わさないままあいさつを交わした。少しばかり緊張しているのか、視線は応接室の至る方向へと飛んでいた。

「ご安心ください。当事務所は秘密は必ず守ります。あなたのお話した内容は公表されることはありません。あなたのプライバシーは保護されますので、何なりとお話ください。」

依頼人の緊張をほぐすために、俺は常にこのような会話をしている。調査においての聞き込みのときでも同様だ。

どんな依頼人も、後ろめたいことや負い目を持ってここへやってくる。それを仕事という名の下に無闇に口外したり、ましてや公表することなどもつてのほかだ。

これこそが、探偵という商売の鉄則でもありモラルでもあるのだ。
「それは助かりますわ。」

依頼人の表情が、少しだけ落ち着いたように見える。どうやら、定番とも言える俺のセリフもムダではなかったらしい。

「すみません。タバコ吸ってよろしいですか？」

「ええ、どうぞ。」

俺は、愛煙しているマイルドセブンを胸ポケットから取り出し、この張り詰めた空氣に身を任せながら、くわえたタバコに火を灯した。

「では、お話いただけますか？」

「ええ。わたし、大林加代子と申します。実はうちの娘が、三日前に家を飛び出してしまって、今日まで連絡が取れないんですよ。わたしもう心配で心配で、どうしたらよいものか……。」

娘の失踪について話を切り出した依頼人。ところが、彼女の表情から、娘の身上を案じる感情が伝わってこない。無理やり平静を装っているのか、それとも……？

「警察へは通報しました？」

「いいえ。知人に聞いたところ、警察に搜索願を出しても、家出人搜索は後回しにされるそうで。そこで頼むのであれば、探偵事務所の方がよいと聞いたものだから。」

「そうでしたか。おっしゃる通り、警察は重大な事件を優先的に捜査する方針ですからね。家出のような事件性のないことに関しては、警察はまともに捜査してくれないのが現実です。」

この事務所を尋ねたことが正解だったと言わんばかりに、警察という公務執行機関がずさんな体制で運営されていることを、俺は依頼人にかいつまんで説明した。

「そんなことどうでもいいわ。すぐにでも搜索してくれます？ お金

ならすぐにもお支払いするわ。」

何ともあっさりそう申し出る依頼人。探偵業界の価格相場を知っているの発言なのだろうか？

俺は言い淀むことなく、あくまでもビジネスライクで対応する。

「ありがとうございます。娘さんの搜索は、わたくし藪鬼にお任せください。必ず娘さんを見つけ出しますのです。」

俺は依頼人を安心させるため、そして元気付けるために自信満々にそう宣言した。

「よろしく願いますわ。それで料金は？」

依頼人は表情を緩めることなく、事を早く進めようとする。俺の方も商売が絡むだけに、物怖じしている場合ではない。

「当事務所では、基本的に一週間単位でコースが決っております。詳しくはこちらをご覧ください。」

俺は目の前にいる生活の糧、いや依頼人に、コースやプランについて事細かに説明した。

「それじゃあ、とりあえず一週間コースでいいわ。」

依頼人は価格に驚く様子も見せず、迷うことなくあっさりコースを決めてしまった。どうやら、金銭面はまったく気にならないようだ。

「かしこまりました。それでは、一週間コースでご依頼ですね。万が一、何かトラブルにより一週間で調査が完了できない場合は、事前にご連絡しますので、こちらの書類に必要事項をご記入ください。」

いざ依頼をゲットできると思うと、俺は不謹慎にも心の中で喜んではしまう。それは当然のことだ。ここで依頼を蹴られてしまったら、俺はしばらく豪勢な料理にありつけないからだ。

そうは言えど、依頼人は辛い現実や悲しい事実、悩んでも悩みきれない心配事を背負って俺のもとにやってくる。だから、俺は依頼人に卑しい心の中を晒すことなど当然できない。

「確かに受け取りました。どうもありがとうございます。」

俺は依頼人から書類と手付金を受け取った。

やばい……。思わず笑顔がこぼれそうになる。俺は必死に、こみ上げてくる喜びを押し殺していた。

「娘さんの写真か何かはお持ちですか？あと娘さんのお名前も教えてください。」

「娘の写真はこれです。名前は加奈といいます。年齢は一七歳、高校二年生ですわ。」

俺の手にした写真には、加奈と呼ばれる女の子の笑顔が写っている。

少しだけ茶色がかった髪の毛を伸ばし、春らしいピンクのカーデイガンを着こなした愛らしい顔立ちの女の子だった。

「加奈さんですね。この写真はお預かりさせていただいてよろしいですか？」

「ええ、どうぞ。」

俺は写真と一緒に、家出少女である大林加奈の詳細を手に入れた。彼女のおおよその身長、よく遊びに行く場所、通っている学校、その学校の住所など。

これだけの情報がそろえば鬼に金棒というヤツだ。

「それではよろしくお願いするわ。できる限り早く、必ず娘を見つけてくださいね。お金ならいくらでも支払いますから。」

依頼人は見せびらかすように、耳元で光るパールのイヤリングに手を触れた。

お金に糸目をつけないところを見ると、家出した娘のことがよほど心配なのだろう。しかし、この冷め切った表情と物腰はどういうことだ……？

「かしこまりました。いいお知らせができるよう精一杯努力しますので、どうか安心してお待ちください。」

俺は誠心誠意をもって、律儀な姿勢でそう約束した。それを聞いた依頼人は、軽く会釈するとそそくさと応接室を出て行った。

「お疲れ様でした。いかがでした？」

事務所のデスクに戻ってきた俺に、そう問いかけてきた鏡子くん。彼女も忙しくなるかどうか、気が気じゃなかったのだろう。

俺は鼻歌交じりに、受け取った手付金を彼女に見せる。

「まあ！正式な依頼ですね、よかったわ。」

冷静沈着な鏡子くんでも、事務所の経営を支える現金には、さすがに頭が上がないといったところだ。

「ああ。これで今晚は豪勢なディナーにありつけるよ。鏡子くんは何か欲しいものはあるかい？」

鏡子くんは、インテリメガネのレンズを光らせながら、満面の笑顔で語り始める。

「わたし、そろそろこのパソコンの買い換え時期だと思うんです。最近、事務処理ソフトがどうも動作不安定だったんですよ。このパソコンでは推奨スペック以下ですし、OSの古さも原因のひとつですから……。」

また始まってしまった。鏡子くんのパソコン講座が……。彼女は筋金入りのパソコン通なのだ。

「この機に、もう少しハイスペックなパソコンを購入しませんか？CPUはペンティアムフォアの一ギガヘルツで、メモリは五十二メガバイトで……。」

俺は申し訳ないが、パソコンはまったくのド素人だ。彼女が流暢に語っている専門用語は、俺にとっては単なる暗号として訳されている。まるで、外国人とお話している気分だ。

というわけで、これ以上話を聞いても仕方がないので……。

「ああ、鏡子くん、わかった。とりあえず君の欲しいパソコンの金額を教えてくれ。買うか買わないか、それを見てから決めることにする。それでいいかい？」

「はい。かしこまりました。」

ふう、これで一安心と、俺は思わず溜息を漏らす。

それにしても鏡子くん、わざと難しい専門用語を並べている気がする。まさか俺の頭をパニックにさせて、強引に新しいパソコンを購入させようという魂胆なのだろうか？

彼女の涼しい表情を見る限り、その辺りの企みはさすがの俺でも読みきれなかった。

「よし、それじゃあ調査開始といくか。」

家出娘の居場所を突き止めるべく、俺は早々と調査へ向かうことにした。

とりあえずどこから当たるか・・・？調査にとって重要なことは、まずどこから始めるかということだ。このスタートラインの見極めも、名探偵にとって重要なことなのである。

「まずはよく行く場所、渋谷に行ってみるか。」

俺は鏡子くんに見送られながら、調査のスタートラインとなる渋谷へと足を運ぶのだった。

調査初日　く男の存在

若者の街、渋谷。

この街を歩き交う若者達は、ここ最近の不景気をまったく感じさせないほど歓喜と快楽に満ちている。

どんな楽しい夢や希望を持って、この毎日を生きているのだろうか？社会に出るまでのわずかな期間、そのわずかな時間に、若者達はみな、果てしないほどの情熱を注いでいる。

ここ渋谷には、そんな行く末を不安視する生き様が、街中のいたるところに散らばっているのである。

俺は賑やかな街並みを歩きながら、対象者である家出少女の軌跡を追う。

彼女はどうも、渋谷のセンター街にある衣料品店に顔を出していたそうだ。この情報は、依頼人である母親からのものだ。

娘が家を飛び出した後、部屋に何か痕跡がないかくまなく探していたところ、ゴミ箱の中から、衣料品店のポイントカードを偶然見つけたらしい。

女子高校生という年代なら、買い物するしなに問わず、その衣料品店をよく訪れていたかも知れない。何かしら、手がかりが得られることを期待しよう。

「ここのようだな。入ってみよう。」

俺はその衣料品店へと足を踏み入れた。

薄暗い店内には、お客である若者達のハートを躍らせるかのようにな、流行のカジュアルな衣装が壁いっぱいに飾り付けてあった。

すでにオレが入店したときも、十人ほどの若者が目を輝かせて、カラフルな衣装を手にとって物色していた。

「いらつしゃいませ。」

レジ係の二十代前半の男性店員が、入店してきた俺に気のない声を投げかけてきた。

キャップ帽からはみ出す茶髪に、耳たぶで光っているピアスが、今風の若者であることを象徴していた。

「俺はこういうものだが。」

俺は嘘偽りなく、正々堂々と調査を遂行する男だ。その場の状況次第では、正体を隠す場合もないとはいえないが、俺はいつも通りに、正々堂々と自分が探偵であることを明かした。

「へー、探偵さんですか？その探偵さんがウチに何か用？」

探偵という存在が珍しいのだろうか、その店員は興味津々な態度を示してきた。

「買い物客じゃなくて申し訳ないが、少しばかり協力してほしい。いいかな？」

俺はそうお願いしつつ、上着のポケットから一枚の写真を取り出した。

「この写真に写っている女性に見覚えはないか？」

その店員は写真を手にすると、対象者の容姿をまじまじと見つめながら、ひたすら唸り声を上げている。

「どうだ、見覚えはないかな？この店で買い物をしたことがあるんだが。」

「うーん、見たことある気はするんだけどなあ……。で、この女の子がどうかしたの？」

俺はどんなときでも、どんな場所においても、調査のいきさつを軽率に口外したりはしない。

万が一、彼女がトラブルに巻き込まれていたとしたら、ここで漏らした話によつて、彼女を身の危険に晒してしまう恐れがあるからだ。

だから俺はこういうとき、目的をばかしたような言い方ではぐらかすようにしている。

「ああ、たいしたことじゃない。ただの素行調査だ。普段の行動を記録しているだけなんだ。」

彼女が下校時にどこへ寄り道して、どこで買い物をして、そして

どこで誰と遭っているのか、そんな素行について調べているのだと、俺はその店員に事細かく伝えた。

このうまいこじつけが功を奏したのか、その店員は疑うこともなく、この俺に懂れの眼差しを送っている。

「へー、さっすが探偵さんだね。実は俺さ、一ヶ月前から働いてるから、買い物客のことはよくわからないんだ。もしかしたら、店長なら知ってるかもね。」

「店長は今いるのか？」

「いや、今日は夕方からの出勤なんだ。だから、また後で来るといいよ。」

この店員の言う店長なら、何か手がかりになる話が聞けるかも知れない。

俺は応対してくれた店員に、後でまた来訪することを告げると、いったん衣料品店を後にすることにした。

「さてと……。」

俺はタバコに火をつけると、アナログ式の腕時計に目をやる。

「夕方までかなり時間があるな。それなら学校の方にも行ってみるか。」

俺は夕方までの貴重な時間を持て余すことなく、彼女が通っている学校へと足を向けることにした。

対象者である加奈の通う学校は、渋谷の街からさほど離れていない場所に存在する。依頼人である母親からの話では、加奈は家出して以来、一度も学校には登校していないそうだ。

渋谷の街を離れること三十分ほど、俺は某私立高校へと辿り着いていた。

校門のそばには、八分咲きほどの桜の木が顔を覗かせて、春風に吹かれた花びらがゆらゆらと空中を舞っている。

この桜の咲き具合を、いつも登校時に眺めていたであろう加奈は、

果たして今ごろどこにいるのだろうか・・・。

「さてと、聞き込み開始といくか。」

俺にとって、高校生への聞き込みはいささかやりにくい。

最近の高校生のパワーは目に余るものがある。いざ聞き込みを始めると、どうも若者特有のペースにはまってしまい、肝心の調査が一向に進まないこともしばしばあるからだ。

今日は乗せられないような気をつけようと、俺は心の中でそう自身に言い聞かせる。

「探偵！？へー、イメージと違うう！」

「えー探偵？始めて見たぜ！なかなかっこいいじゃん！」

「何か用？あ、わかった！さてはあんた、新手のナンパ師でしょ？」

「何だアンタ？こっちは用なんてないぜ。じゃーなー。」

結果は最悪だった・・・。どいつもこいつも、俺の話をまともに聞いてもくれない。まあ予想はしていたが、この収穫のなさにながら嘆くばかりだった。

俺のような見知らぬ男が、校門付近で高校生に声を掛けまくっていたせいか、とうとう厄介な人物を登場させてしまった。

「ちよつとあなた！そこで何をしているのですか！？」

甲高い怒鳴り声を上げながら、凜々しい表情の女性が校庭から駆けてくる。そして彼女は、まくし立てながら俺のもとまでやってきた。

「あなたはいったい誰ですか！？この学校の生徒に何の御用ですか！？」

あらぬ方向に誤解されてしまうと後からが面倒だ。

えらい剣幕で怒号を発するこの女性を、俺は必死になってなだめようとする。

「待ってくれ。俺は怪しいものじゃない。まずは俺の話を聞いてくれないか。」

話し方や風貌からして、この女性は学校の教師に違いないだろう。それにしても、大きな定規持参でここまでやってきたのは、さすが

の俺も度肝を抜かれた。

「この期に及んで言い逃れする気ですか？とんでもない人ですね！警察に通報しますわよ！」

おいおい警察なんて、そんな物騒なものではできる限りお断りしたい。

俺はそれだけは阻止しようと、手帳から素早く名刺を取り出して、取り乱した女教師の目の前に突きつけた。

「俺は探偵だ。だから落ち着いてくれ。」

「えっ！？」

狂乱していた女教師が一瞬たじろいだ。それでもにらみは利かしたままで、警戒心までは解いてくれない様子だ。

「どうして探偵がこの学校に来たのですか？」

俺はここまでの経緯を、彼女に事細かく説明した。

家出少女のことを知っていたのか、彼女は表情を青ざめながらも、俺のことを信じてくれたようだ。

「彼女のことで……。これは大変失礼しました。ここでは何ですから、どうぞ校舎の方へ。」

その女教師に促される格好で、俺は某私立高校の敷居をまたぐことになった。

この某私立高校は、東京都内でも中レベル、文武両道を重んじるそれなりに名の知れた学校だ。

すれ違った生徒たちの大半は、この俺にさわやかなあいさつを交わしていた。生活指導が行き届いている証拠なのだろう。

女教師に導かれるがまま、俺は校舎内の応接室まで案内された。

堂々と居据わる本皮製ソファーに腰掛けると、女教師は起立したままで、俺に対して腰を低くしながら謝罪を申し出る。

「先ほどは申し訳ございません。わたくし、生活指導担当という立場から、生徒達に何かあったらと思うとつい我を忘れてしまうよう

で。改めてお詫びいたしますね。」

その女教師は謝罪を終えるなり、簡単な自己紹介をしてくれた。

「わたくし、この学校の教員を務めております神鳴瞳と申します。わたくし、実は大林加奈さんの担任でもあるのです。」

かしこまったあいさつをする、目の前の神鳴と名乗る女教師。

ハイヒールを履いているせいか、身長は見た目よりも高く、長い髪の毛を後ろで結び、化粧も薄く清潔感を感じさせる。

たるみのないスーツを着こなし、短めのタイトスカートから伸びる美脚を見る限り、さっきの暴走行為などとても想像できない。

細く切れ長の瞳で俺を見つめる姿は、不謹慎にも、色気という言葉葉を匂わせるそんな女性だった。

「率直に伺いますが、加奈さんが家出するような理由、学校では何かあったんでしょうか？例えば、いじめにあっていたとか、学業で落ち込んでいたとか？」

神鳴は失礼しますとばかりに、俺の向かい側のソファへ腰を下ろした。

「わたくしの知る限りでは、そのようなことはありませんでした。ですから、加奈さんのお母様からこのお話を伺ったときは、正直なところ愕然としてしまいました。」

神鳴の話では、加奈はとても真面目で立派な学生だったようだ。

日頃から勉強に取り組み、成績も高順位に在位し、スポーツにおいても優秀で、友人も多くクラスでも人気者だったという。そんな非の打ちどころのない彼女が、なぜ家出を・・・？

ここでの証言を踏まえるなら、家出の原因は学校内のトラブルではなく、それ以外のトラブルの可能性が高いだろう。

俺は許可をいただいたタバコを堪能しながら、そんなおぼろげな推理をしていた。

「すいません、先生。加奈さんの友人を紹介いただけませんか？もう少し、彼女のことにについて詳しく知りたいですから。」

神鳴は整った美顔で快く承諾してくれた。

「少々お待ちくださいね。」

彼女が席を外してから数分後、彼女は一枚のレポート用紙を持って戻ってきた。

「わたくしの知る範囲で、加奈さんの友人の詳細をここに記載しておきました。」

神鳴が手渡してくれたレポート用紙には、一人の女性の名前、そして住所と電話番号が明記されていた。

「この生徒には、わたくしの方から前もってお話しておきますので訪ねてみてください。明日なら土曜日ですし、午後であれば彼女も自宅にいますでしょう。」

親切丁寧に協力してくれた神鳴に、俺も丁寧な姿勢でお礼の言葉を告げる。

「ありがとうございます。それでは、そろそろ失礼します。」

「いいえ。こちらこそ、あまりお役に立てずに申し訳ありません。もし何かあればお知らせいたしますので。」

俺は自らの名刺を神鳴に手渡してから、黄昏色に染まり始めた学校の校舎を後にする。

「お、もういい時間だな。」

時計の針を見る限りもう夕方だ。俺はこの足のまま、さつき訪ねた渋谷の衣料品店へと舞い戻ることにした。

* *

見渡す景色はすっかり夕焼け空、儚い心を映し出すかのような真っ赤な落日だ。

渋谷のセンター街は、この時間でもまだ賑わいを見せている。

さつきまでと違って、通り過ぎる人々の年齢層も若干変化し、お疲れモードな企業戦士の軍勢が、癒されることのない自宅という城へ帰還する姿が見受けられた。

そんな虚ろな影とすれ違いながら、俺は日の沈み始めた街中を歩いていく。

俺は約束した通り、さつき訪れた衣料品店の前までやってきた。時間が時間だけに、お客の姿も少なくなっているようだ。

閉店の準備だろうか、窓越しに見える店員達は、いそいそと売り物の整理に追われていた。

俺はそんな店内に、歩き疲れただるい足を一步踏み入れる。

「いらつしやいませ。」

俺の姿を見て声を掛けた男性店員は、さつきの無気力な若い店員ではなかった。

金髪に染めた長い髪の毛に、偉そうに生やしたあごひげ。この醸し出す貫禄は間違いない。彼こそ、この店の店長であろう。肩からぶら下げたお店のロゴ入りのエプロンが、それを物語っていた。

「すみません、ちょっとお尋ねしてもいいですか？」

「はい？」

俺は迷うことなく名刺を差し出した。

「ああ。お待ちしておりました。」

その男性は名刺を見るなり、俺の存在を快く受け入れてくれた。どうやら、さつきの店員が話を通してくれていたらしい。

「申し訳ないけど、奥の方まで来てもらえませんか。」

店長は招き入れるように、俺を店内の奥へと案内した。

その奥にある部屋は店員の控え室のようだ。どうも倉庫の役割もあるらしく、大きな段ボール箱やハンガーに掛かった衣装が無造作に置かれていた。

プラスチック製のテーブル席に、俺と店長は向かい合って腰を下ろした。

「わざわざ戻って来ていただいてご苦労さまでした。俺がこの店の店長です。よろしく願います。」

「こちらこそ。何の前触れもなく邪魔してしまつて。俺は探偵の藪鬼と申します。ちょっとお聞きしたいことがあります。」

「どうぞ、何でも聞いてください。」

店長は落ち着いた感じで、あごひげを手で弄びながら聞く体勢に

入ってくれた。

俺はお言葉に甘えて、加奈のことを知っているかどうか、彼女の写真を見せながら店長に尋ねてみた。

「この女の子、ご存知でないですかね？」

俺はそこに写る彼女を見るたびに、明るくてかわいらしい満面な笑顔がとてもいじらしく思えてしまう。

「あ、ああ。」

数秒ほど写真を見つめていた店長が、何かを思い出したように小さく口を開いた。

「知ってますか？」

「ええ。よく来るお客さんでしたよ。たしか、加奈ちゃんだったかな？」

店長は加奈の顔のみならず、名前まで知っていた。彼女はそれなりな常連客だったと見える。

「ええ、そうです。名前は大林加奈。最近、彼女を見たのはいつか覚えてますか？」

俺は店長に立て続けに質問をぶつける。

対象者の存在を知る人物には徹底的に質問する。これが探偵における調査マニュアルの一つなのだ。

店長曰く、加奈を一番最近見かけたのは、今から一週間ぐらい前とのことだ。

加奈が家出をしたのは三日前だったはず。つまり、店長が彼女を最後に見かけた日は、まだ彼女が家出をする前ということになる。

「その一週間前の彼女ですが、いつもと違うような感じはなかったですか？例えば、元気がなかったとか、見た目が違っていったとか、あと、いつもと違う人と一緒だったとか？」

俺の矢のような問いかけに、店長はハツとしたような表情を俺に向ける。

「そうそう！この前見たときは、そうだ、見たことのない男と一緒にだったなあ。」

「見たことのない男・・・？」

俺は探偵の七つ道具の一つ、システム手帳のメモ欄をサツとめくった。

「加奈ちゃんがここへ来るときは、いつも女の子と一緒になんですよ。まあ、この店は女の子向けの衣装が多いですからね。でもそのときは、なぜか男性と一緒にでしたね。しかも、ちよつとガラの悪いヤツでしたよ。」

なるほど、ガラの悪い男と一緒に・・・。彼女の家出に関わっている可能性は否定できないだろうな。

俺はそれらを聞き漏らすことなく、システム手帳にスラスラとペンを走らせる。

店長がその男に見覚えがないとなると、彼から聞き出せる情報はこんなところか。それでも、有力な情報を手に入れたことに違いはない。

「どうもありがとう。役に立ちました。」

「いえいえ。それより加奈ちゃんに何かあったんですか？バイトからは、行動を監視するための調査だって聞いたけど、今の質問からして、そんな感じがしなかったもんだから。」

この店長、なかなか勘の鋭い男のようだ。このまま警戒心を抱かせてしまうと面倒なことになりかねない。

不意に勘ぐりをされるぐらいなら、いっそすべてを打ち明ける手もあるだろう。ましてや、彼はこれからの調査にも役立つってくれるかも知れない。

そういう結論に行き着き、俺は事のすべてを店長に包み隠さず話すことにした。彼は信用できる、俺はそう判断した。

「・・・そうだったんですか。わかりました。俺もできる限り協力しますよ。」

そう約束してくれた店長に、俺は自らの名刺を手渡した。

「それじゃあよろしく。」

衣料品店を後にした頃、渋谷の街はもう夜の帳を下ろした後だっ

た。それでも、商店やビルを飾るネオンが輝いて、街の暗がりをも明るく照らしていた。

事務所まで帰宅する途中、俺は今日一日の成果を頭に描いていた。そして、明日からの調査のために、さまざまなキーワードを整理していた。

家出少女加奈……。担任の教師が言うには、彼女は学校では一目置かれていたようだ。

いじめや学業不振といった理由で家出したわけではない。そうだ。彼女の家出の原因は、学校内ではなく他のところにあるはずだ。

さらに、行きつけの衣料品店に訪れた、彼女と一緒にいた謎の男性の存在。無論、この男性の正体は不明のままだ。

「よし、今日の調査はこんなところか。」

明日からの調査方針をシステム手帳に書き込むと、俺はまばゆいネオンサインで溢れるコンクリートジャングルへ足を向けていた。

*

*

『プルルルル……。プルルルル……。』

ん、この着信音、俺の携帯電話か？

『プルルルル……。プルルルル……。』

うるさいなあ。誰からだ？……。事務所かつ！？

「もしもし、鏡子くんか？」

俺は携帯電話を手に、声を裏返しながらか呼びかけた。

「はい、そうです。先生今どちらですか？」

「え？ああ。まだ調査中なんだ。」

「そうですか。わたしはまた、てつきり雀荘かと思ってましたか？」
ギクツ……。！！

「ま、まさか、そんなわけないだろう、ははは。ところで何かあったのかい？」

「はい。つい先ほどですが、クライアントからお電話がありました。できれば連絡が欲しいと申されておりまして。」

ちなみに、クライアントとは専門用語で依頼人のことだ。彼女は
やたら横文字を使うから困ってしまう。こう見えても、俺は学生時
代英語が大の苦手だったのだ。

「そうか、わかった。悪いけど電話番号を覚えてくれないか？」

鏡子くんが教えてくれた電話番号を、俺は手元にあつた点数表に
書き込んだ。

「ありがとう。そうだ鏡子くん。もしだったらもう上がってもらっ
て構わないよ。俺はあと二時間ぐらいかかりそうだから。」

「はい、そうさせてもらいます。先生、あまり無理しないで下さい
ね。どうせ負けているでしょうから。」

鏡子くんのねぎらいの言葉、かなりトゲトゲしかったな。やはり
彼女に嘘はつけないらしい。実際、麻雀してるし。しかも、しっか
り負けてるし……。

「おいおい、先生。点数表に変なもん書くなよ。あんた負けてるか
ら、わざといたずら書きしやがったな！」

「違うつて。ちょっと急ぎで電話する用事が入ったからいったん席
を外すよ。言っておくが、まだ勝負はついてないぞ。今日は絶対に
俺が勝つんだからな。」

俺は他の面子にそう豪語しながら、駆け足で雀荘から飛び出して
いく。

『ブルルル……』

それにしても、なぜ依頼人から連絡が来たんだろう？

まさか、娘が帰ってきました、とかいうふざけたオチじゃあるま
いな。せつかくいい仕事だったのに、ここで調査が終わってしまっ
たら、ここまでの苦労が水の泡になってしまう。

俺は心でぶつくさ言いながら、雀荘の入居したビルの片隅で依頼
人宅へコールし続けた。

十回ほどコールした後、ようやく相手側の受話器が上がった音が
聞こえた。

「もしもし？わたし、藪鬼探偵事務所の藪鬼です。」

「あの、どういったご用件でしょうか？」

電話の相手に、いきなり素っ気なく返事されてしまった。しかも、その声を聞く限りあの依頼人の声ではない。だが、女性の声であることは間違いなかった。

「あの、そちら大林さんのお宅ですよ？加代子さんはいらつしやいますか？」

「は、はい。奥様ですね。す、少しお待ちください。」

やけにおどしている女性だ。この話し方からして、彼女は多分メイドか何かだろう。やはり、依頼人はかなり裕福な暮らしをしているようだ。

「はい、お電話代わりしました。探偵さんですか？すみませんね、わざわざお電話をいただきました。」

「あ、いいえ、とんでもない。それより電話を出られた方は、メイドさんか何かですか？」

「ええ。使用人です。もしかして失礼でもありましたか？彼女は従事したての見習いでして。他の使用人はもう帰宅しておりましたので、致し方なく電話を応対させましたの。」

どうやら依頼人宅には、さっきの女性以外にも使用人が存在しているらしい。何ともうらやましい限りである。

「あ、それより、何かありましたか？」

俺は平静を装うも、依頼人からどんな答えが返ってくるのか、内心ドキドキしていた。

“娘が帰ってきた”という答えだけは極力避けたいが、それが双方にとつても一番いい答えなのはわかっていた。

俺も本心では、できればそうであってほしいと願っている。しかし、こっちも生活がかかっている。依頼が中途半端に解決してしまうと、ここまでの努力がすべて無駄骨になってしまうのだ。

できることなら、俺が娘を探し出して自宅まで無事に送り届ける。そして成功報酬をしっかりと受け取る。これこそが、俺の理想ともいえる解決手段なのである。

「何かありましたかつて、それはこちらのセリフですよ。娘のことで何かわかりました？」

「え？」

どうも俺の取り越し苦労だったようだ。依頼人は、俺の調査結果を知りたがっていただけだった。

まったく、ヒヤヒヤさせてくれる……。俺は心の中で、大きな溜息を漏らしていた。

「大林さん、お気持ちはわかりますが、ご承諾いただいた際にもお話しした通り、調査報告は一週間後にそちらへお届けすることになっています。それまでは、特別なことがない限り報告はできませんので。」

当探偵事務所の約款について、俺は言い聞かせるように丁寧に述べた。しかし、依頼人は素直に応じてはくれない。

最愛の娘の失踪という事実が、彼女をここまで追い込んでしまったのか、彼女はかなり苛立ちをあらわにしていた。

「何でも結構ですから、教えてくださいよ！もしかしてあなた、本当は娘の居場所を知っているんじゃないやありませんの？まさか、娘に口止めされているんじゃないでしょうね！」

依頼人は怒鳴り声で、とんでもないことまで口走っていた。

俺はこのとき、もし娘を見つけていれば、とつとそっちへ引き渡してがっぽり報酬をもらっている、声を大にして叫びたかった。「落ち着いてください。わたしは嘘はついていません。まだ調査初日ですから、娘さんに接触すらできていませんよ。そんなにあつさり見つかるぐらいなら、あなたの方で見つけているんじゃないやありませんか？」

俺も苛立ちのあまり、少しでも語気を強めて物申した。

温厚な性格を売りにしている俺は、こういった状況でも感情的にならないように気をつけている。だが、今回は少しばかり感情を高ぶらせてしまったようだ。

俺は彼女を納得させるため、とりあえずここまでの成果をかい

まんで報告した。その甲斐もあつてか、彼女はようやく落ち着きを取り戻してくれたようだ。

「そうですか、わかりました。」

「調査は明日も続きます。娘さんはきっと見つけ出します。だから、もうしばらくお時間をください。」

俺は精一杯の誠心誠意を示して、彼女との取り留めのない長い通話を終えた。

「ふう。明日またがんばるとするか。」

俺はすっかり気分が萎えてしまい、麻雀を続けることなく、このまま事務所へと帰ることにした。

今夜はかなり負けていたから、逃げられたと思われたかも知れないな……。

調査二日目　友人の想い

調査開始二日目、土曜日の朝を迎えた。

いつもより早めに目が覚めた俺は、鏡子くんが作ってくれたほろ苦いコーヒーを飲みながら、今日の行動スケジュールを一通り書き留める。

「さて、そろそろ出かけるか。」

「いつてらっしゃい。今日はさらに、いい情報が入手できるといいですね。」

鏡子くんはさわやかな声で俺を励ましてくれた。

調査初日は進展はあったものの、これだというほどの収穫は得られなかった。彼女は彼女なりに、その辺りのことを気遣ってくれているのだろう。

「まっただ。」

俺は苦笑いでうなずくと、スケジュールを綴ったメモを鏡子くんへ手渡した。そして、よれよれの上着を羽織り、俺は事務所の玄関から出かけていく。

今日はとてもいい天気だ。雲一つない晴天とは言えないが、澄んだスカイブルーが俺の曇った気分を癒してくれる、そんな春の青空だった。

「・・・。」

今ごろ、加奈はどこにいるのだろうか？どこかで俺と同じように、この澄んだ青空を眺めているのだろうか？

俺は天を仰ぎながら、何となくそんな不毛なことを思い浮かべていた。

「今とはにかく、加奈の足取りを追うしかないな。」

俺は両手で軽く頬を叩きつつ、今日の調査をスタートさせる。

今日のオレがまず向かう先は、お馴染みのヤツのところだ。ヤツの正体が誰かって？

ヤツっていうのは、俺の昔からの親友・・・というよりは、悪友に近いかも知れない。とはいえ、なかなか信頼のおけるいいヤツだ。俺は今回の調査においても、やはりヤツの情報網を頼ってしまう。それだけ、ヤツが頼りになるという証拠でもあるのだ。

事務所から離れること一時間ほど。俺はヤツの暮らす寺社まで辿り着いた。

高笠寺。ヤツはこの寺の住職を務めている。

いくつもの杉の木の陰となっている本殿に、慎ましく立ち並ぶ墓石。そのどれもが、落ち着いた佇まいのままにじつとここに居据わっている。

そんな静かな寺の敷地に足を踏み入れて、俺は歩き慣れた境内を突き進んでいく。

この境内は、毎日きれいに掃除されているせいか、いつもゴミ一つすら落ちていない。おまけにいたずらに騒ぐ子供達の姿もなく、寺全体が異様なほど清閑としている。

ここを訪れるたびに、人気のないだっ広い空間に独りぼっちにされた気分になり、孤独という重圧に押し潰されそうになってしまう。

「よう、藪ちゃんじゃないかあ。」

俺の背後から聞き覚えのある声がこだました。その大きな声は、周囲を包んでいた静けさを消し去るほどに響いていた。

俺はおもむろにその声のした方向に振り向く。

「おう。久しぶりだな、助智。元気だったか？」

そこにはヤツ、いや俺の悪友である佐倉助智がいた。

丸坊主頭で袈裟を羽織っているその姿は、まさに寺の住職の風貌そのものだ。

ところがこの男、趣味がボディービルというおかしなヤツで、その袈裟の下には、鍛えぬかれた肉体美が隠されている。

「ああ、おかげさまでね。」

俺達は久しぶりの再会だっただけに、他愛もない昔話でしばしの

間盛り上がった。

「ここに来たってことは、何か調査してるんだろ？今回はどんな内容なんだい？」

さすがに助智には気付かれていたようだ。とは言うものの、調査がないときに、俺がここへ来ること自体あまりないのだが。

「いや、実はな。」

俺は助智に、今回の家出人捜索についてかいつまんで説明した。

「へー、失踪かぁ。それで、今のところ手がかりはどうなの？」

俺がはるばるここまで足を運んでいるのは、その手がかりが薄いからだ。助智もわかつていると思うが、俺の現状を把握するために、あえて尋ねているのだろう。

「これだっという情報はまだない。対象者と接触していた人間を洗っているんだが、今のところ大きな手がかりはないな。」

ここ最近、高校生の女の子がフラフラしていたとか、誰かに唆されたとか、そういう噂などが耳に入っていないか聞いてみると、助智は苦笑しながら手を横に振っていた。

「いやぁ、そんな話は聞いてないな。一七歳ぐらいの少女だからね。もしそんなことあったら、あつという間に俺の耳まで飛び込んでくるよ。」

「まあ、そうだろうな。」

俺は参考までに、助智に加奈の写真を見せてみた。期待はかなり薄いだろうが、もしかすると見覚えがあるかも知れない。

助智は写真を受け取るなり、怖い顔で食い入るように彼女の笑顔を見つめている。

「ほう、これは・・・！」

表情をより険しくして、助智は目を大きく見開いた。まさか、加奈のことを知っていたのか！？

「おい、この女の子のこと知っているのか？」

俺は慌てる素振り。助智の肩に掴みかかった。

「いや、かわいい娘だと思って。」

「・・・。」

そういえばコイツ、自他共に認める女子高校生フリークだった。久しぶりだっただけに、俺はそのことをすっかり忘れていた。

俺は分厚い握り拳を作ると、ヤツのコメカミ目掛けて思いきり叩きつけてやった。

「ははは、ゴメン、ゴメン。とりあえずさ、俺もいろいろと聞き込んでみるよ。この写真借りていいかい？」

「おう、そうしてくれ。俺一人じゃ限界があるからな。」

助智は住職という職業からか、さまざまなお偉いさんや危ない方々の葬儀にも顔を出している男だ。そのおかげで、一般人の知りえない裏情報がヤツの耳に入ってくる。

俺がこの男に頼る理由はそこにある。そう、俺では絶対に掴むことのできない極秘ネタを入手するために。

「了解。ちゃんとお礼はしてくれよ。」

「まかせろ。無事に解決したら、温泉麻雀にでも招待してやるさ。」

「お！いいね。こりゃ踏ん張るしかないね。」

この男も、俺と同じで麻雀好きなヤツだ。たいして強くもないくせに、調子に乗ってどんな誘いにも付き合うからすぐにカモにされてしまう。

正直なところ、強いとは言い切れないこの俺に、ただ一人役満を振った男でもある。俺から言わせれば、これほど哀れな男もいないだろう。

助智に協力をお願いをした俺は、いよいよ次なる目的地へと向かうことにした。それは中目黒である。

そこで俺は、加奈の友人に接触することにより、彼女の家出にまつわる情報を聞き出すつもりだ。その友人が、俺にすんなりと協力してくれるといいが・・・。

* * *

電車で揺れること一時間。俺は加奈の友人の家がある中目黒へと

やってきた。

腕時計を見ると、時刻は午後一時を過ぎていた。この時間だったら、加奈の友人も自宅へ帰ってきているだろう。

俺はくわえたタバコに火をつけると、高級感の漂う閑静な住宅街に向けて歩き出した。

俺はポケットから紙切れを取り出した。これは、加奈の担任である神鳴から受け取った、友人宅の所在地が書かれたレポート用紙である。

「この住所だと、この辺りだな。」

俺は表札を頼りにしながら、こぎれいな住宅をしらみ潰しに確認していく。

そのたびに、近隣のミセスに不審な目で見られて、俺は後ろめたくなって気ばかりが焦ってしまう。そんな苦労はしたものの、さほど時間もかからず、友人宅は思いのほか早く見つかった。

その友人宅はまさに白亜の豪邸で、庭や車庫の大きさから家主の裕福な生活ぶりが垣間見える。

俺は咳払い一つしてから、インターホンのボタンを押した。エコーと共に、家中に呼び出し音が反響している。

「はい、どちらさまですか？」

インターホン越しから流れる女性の声。

「恐れ入ります。わたくし藪鬼探偵事務所の藪鬼と申します。実は折り入って、娘さんにお聞きしたいことがあります。今いらっしゃいますか？」

「・・・はあ、おりますが。」

やぶからぼうに探偵が訪れたら、誰だっという思いはしないだろう。

探偵という商売は、人間の裏側を暴くといった黒いイメージが付いて回る。そういう理由から、探偵という存在そのものを毛嫌いして、できる限り関わりたくないと思う一般人は少なくない。

この訝しがるような女性の声は、まさにそれを感じさせるものだ

った。なぜ探偵がここへ・・・？といった心境なのだろう。

「ご心配いりません。娘さんの友人についてお聞きしたいのです。素行調査の対象者が、たまた娘さんの同級生だったものですから。」

この俺も、伊達に長いキャリアを積んでいるわけではない。

相手の警戒心を解くために、話し方を工夫したり、声の大きさを調整したりといった、対話マニュアルのようなものが頭の中にしまっているのだ。

「ん？」

インターホンの先から、さつきとは違う、もう一人の女性の声が聞こえてきた。

耳を澄ましてみると、何やら双方で話し合っているようだ。もしかして娘だろうか？

「あ、探偵さん？あたし啓子よ。加奈の友達の。いいよ、中に入っ
て。」

声の主はやはり娘だったようだ。どうやら、神鳴が事前に伝えておいてくれたらしい。あの美脚先生には感謝しなければいけない。開錠された玄関から家の中へ通されると、加奈の友人の啓子が俺を笑顔で出迎えてくれた。

彼女は俺の手を引っ張るなり、二階にある自室へと向かう。彼女はどうも、俺の存在、というよりは探偵の存在を珍しがっているようだ。

「さあ、入って。」

俺は啓子に手招きされると、彼女の自室へと足を踏み入れた。

若い女の子の部屋らしく、ベッドの上には、デイズニー系のぬいぐるみが添い寝するように横たわっている。

机の上や引出しには、友人と一緒に写っているプリクラシールが所狭しと貼られていた。

「何ボーっと突っ立ってんの？早く座りなよ。」

啓子はベッドの上にどっかりと腰を下ろした。

彼女は淡青色のブラウスを着込み、フリル付きのオレンジ色のミニスカートを履いている。ぶかぶかなルーズソックスまで揃っているところを見ると、彼女もいわゆる今時の高校生のようだ。

俺は遠慮することなく、彼女と向き合うように床の上にあぐらをかく。

「加奈のことで何か聞きたいんでしょ？」

ボブカットの髪の毛を触りつつ、俺からの質問を待ち構える啓子。俺は差し当たり、加奈との関係について彼女に尋ねてみた。

「あたしと加奈はね、中学校時代からの友達だったんだあ。」

そんな彼女と加奈は、中学校の頃はよく一緒に買い物に行ったり、お互いの家で遊ぶ機会も多かったらしいが、最近になってからは、学校内でたまに世間話するぐらいの仲になっていたとのこと。

つまり、最近の加奈の行動については、詳しくは知らないのとことだった。

「先生からもう聞いているとは思うが、加奈は今、自宅を飛び出して失踪中だ。何か心当たりはないかな？」

啓子は人差し指であごを突付いて、一生懸命に記憶を辿ろうとしている。

「うーん……。これといって、おかしいとこなかったな。」

真面目な顔で思い出してくれた啓子だったが、加奈の失踪につながる答えまでは出てこなかった。

「でもね、ちよつと気になることがあるんだ。」

「気になること？どんなことだ？」

啓子はいきなり、俺の顔の真ん前に、その小さな顔を近づけてきた。

「お、おい、待て。何をする気だ!？」

「ぶっ！やだあ、何勘違いしてんのー！フッフ、探偵さんって結構ウブなんだね。ちよつと耳貸して。」

「・・・え？」

俺は年甲斐もなく顔を真っ赤にしたまま、彼女のひそひそ話を耳

で受け止めた。

「実はね、二週間ぐらい前なんだけど、あの子さ、あたしに変なこと言ってたんだ。ウチにある高級そうなツボを親に黙って売っちゃって、そのお金で高級ハンドバッグを買った……ってね。」

「！」

それは予想もしない話だった。優等生のはずの加奈がそんなことをしていたとは……。シヨックの余韻を隠しながら、俺は啓子の話に耳を傾ける。

「あの子の家って、すっごいお金持ちなの。でね、金持ちの娘はもううんざりとか、あんなごう慢な母親なんか大嫌いとか、そんなこと言ってたのよ。」

啓子の話を聞き終えた後、俺はある一つの結論に達していた。

「加奈の家出の原因は、家庭内のトラブルということか。」

俺は続けて、渋谷の衣料品店店長が言っていた、加奈と一緒にいたという男の存在についても啓子に尋ねてみた。

「うーん……。ごめん、あの子の男関係まではわかんないわ。でもね、もしかするとあの子なら知ってるかも。」

「あの子？誰のことだ？」

俺は少しばかり気が焦っていた。何とかこの男というキーワードの謎を解き明かしたい思いで、急かすように啓子を促した。

「加奈と同じクラスの友達なんだけどね。高塚裕美っていう子だよ。最近加奈とよく遊んでるって聞いたから知ってるかも。」

啓子の話では、その高塚裕美という同級生は渋谷に住んでいるそう。うだ。残念ながら住所まではわからないが、電話番号は知っているというので、俺にメモを渡してくれることになった。

かわいい人形のストラップをぶら下げた携帯電話を操作しながら、啓子はスラスラと電話番号をメモしてくれた。

「ありがとう。正直言って助かったよ。まさか、君がここまで積極的に協力してくれるとは思わなかったからね。」

気に障ったのか、啓子の表情が突然険しくなった。

「当たり前じゃん！加奈はね、あたしにとって大切な友達なんだよ。ここまで協力したんだからさ、早くあの子見つけてよね！」

啓子のその言葉には、友人の身を案じる心やさしい気持ちが表れていた。俺はその言葉を忘れないよう、しっかりと胸に刻み込んだ。「まかせておけ。君の協力は無駄にはしない。無事に見つけ出したら俺を信じてくれ。」

「・・・うん。」

啓子は涙目でうなずいた。彼女の涙のためにも、俺はもうひと踏ん張りすることを心に誓った。

俺は啓子にお礼と別れを告げると、新たな聞き込みの対象となる高塚裕美に遭うため、急ぎ足で渋谷へと足を運ぶのだった。

* *

俺は今日もまた、ここ渋谷の街へとやってきた。この街は相も変わらず、無節操で無気力な若者達でこった返していた。

「何となくだが、加奈の行方を辿る道筋が掴めそうな気がする。」

俺は根拠こそないものの、心の中でそんなことを期待していた。

これから接触を試みる高塚裕美は、果たして自宅にいてくれるだろうか？俺は携帯電話を握り締めて、啓子が教えてくれた番号へ電話をかけた。

『ブルブル・・・』

電話で話すだけなら、わざわざ渋谷まで来る必要はないのではないのか？と思われるかも知れない。

俺がなぜ、高塚の自宅がある渋谷までやってきたのか。それは、強いて言えば礼儀作法の一つというものだ。

こちら側が遭わせてもらう、話を聞かせてもらうという立場を忘れてはいけない。しかも、手がかりになるような話題だったら、電話ではなく、直接遭って聞いた方がいいこともある。

お互いに真剣な目で向き合えば、お互いの真剣な気持ちも伝わるというもの。こんな単純なことも、探偵における聞き込みのノウハ

ウと言えるだろう。

「もしもし？」

「あ、もしもし？高塚さんのお宅ですか？」

電話に出た人物は、声色からして中年の女性だった。多分、高塚裕美の母親であろう。

「ええ、そうですけど？どちら様ですか？」

「わたくし藪鬼探偵事務所の藪鬼と申します。娘の裕美さんはご在宅ですか？」

俺はいつものように、自らの素性を正直に明かした。すると、電話の相手は予想外な反応を示してきた。

「まあ、探偵さんですか。娘は只今おつかいに出ておりまして。もう間もなく帰ってくると思いますけどいかがされます？」

電話の相手、いや裕美の母親は臆することなく、いたって普段通りの電話応対をしてきた。

「裕美さんに何点かお聞きしたいことがあるので、お邪魔させていただくことは可能ですか？」

「ええ、結構ですよ。こちらの住所をお教えしましょうか？」

裕美の母親は、俺からの申し出を疑いもせずすべて受け止めてしまふ。ここまで疑わないのも、他人事ながら心配になってしまふが、俺の思い通りになったことはありがたい。

母親から住所を教えてもらい、これからすぐに向かうと伝えてから、俺は通話を切った。

「住所を聞いた方がいいが、さてどうやって向かうか……。タクシーならすぐにでも到着できるが、さて、どうしよう？」

頭を傾げながら悩んでいると、背後から自動車のクラクションが鳴り響いた。俺はビックリして振り向く。

「おーす、藪ちゃんやんかあ。」

俺を呼び止めたのは、渋谷駅周辺をうろろしていたタクシートの運転手であった。しかも、その運転ちゃんは俺の知り合いでもある。

「おお、哲か。最近見かけないと思ったら、この辺りにいたんだな。」

「彼曰く、俺がそわそわと悩んでいる姿を見かけて、何しているのか気になって、たまらず声を掛けてきたとのことだ。」

「ところでこんなとこで何してんの？タクシーだったら、ぜひとも乗ってや。」

これこそ天の助けと言うべきか、俺はありがたく哲のタクシーに乗せてもらうことにした。

「どこまで行ったらええんや、藪ちゃん？」

「ここまでだ。大急ぎで頼む。」

「了解や。」

タクシーを軽快に乗りこなすこの男、本名は倉田哲也という。年齢は俺より上だが、人懐っこい性格からか、俺のことを「ちゃん」付けで呼んでいる。

数年前のある調査をきっかけに知り合ったのだが、その際には、遠方までの移動やら何やらでかなり世話になった。

大阪出身でありながら、わざわざ上京してきてタクシーの運転手をしている一風変わった人物でもある。

「藪ちゃん、今回はどんな調査してるん？」

「家出人搜索だよ。あの時からほとんど変わらない仕事ばかりさ。」
目的地に着くまでの間、俺と哲は他愛もない昔話を語っていた。
渋谷の街中を走行すること約十分、哲はタクシードライバーらしく、俺を無事に目的地まで送り届けてくれた。

「ほな藪ちゃん、がんばってな。またいつでも利用してや。」

俺にほころんだ顔を見せながら、哲は次なるお客を求めて、猛スピードで渋谷駅方面へと帰っていった。

「さてと、ここに間違いないな。」

俺は高塚裕美の自宅の前で立ち尽くす。というよりは、棒立ちとなっていた。

この家、一言で言うならでかい。まるで城壁のようなコンクリート壁に取り囲まれて、周辺の住宅の中でも一際目立つぐらいバカで

かい。

俺は圧倒されつつも正門まで歩み寄り、備え付けのテレビのような画面を見してみる。その画面の脇に呼び出しボタンがあったので、俺はそつと押してみた。

しばらくすると、その画面に一人の女性が映った。それと同時に、さつき電話で話した声と同じ音声が流れてきた。

「いらつしゃいませ。探偵さんですね？お待ちしておりました。どうぞお入りください。」

画面に映った女性が裕美の母親のようだ。

落ち着きのある声から想像できないほど、彼女の見た目はかなり若い。豪邸の奥様らしく、とても丁寧にやわらかい物腰で応対してくれた。

俺は招かれるように、自動的に開かれた正門から豪邸内へと入っていく。

日本庭園のような大きな庭、いたるところに植えられた松の太木、先の尖った大きな岩、そして錦鯉でも泳いでいそうな池。ここには、典型的な豪邸を飾り立てるアイテムが一通り揃っていたようだ。

広い庭をしばらく歩き続けて、俺はようやく邸内へ入れる玄関を発見することができた。

「失礼します。」

「いらつしゃいませ。どうぞ。」

玄関の奥では、母親が三つ指を立ててお辞儀をしていた。

何と大げさな出迎えだろうか。俺はつい、この家の主人にでもなったような気分だった。

「あの、娘さんは戻られましたか？」

「いいえ。まもなくだと思いますので、お上がりになってお待ちください。」

俺は用意された高級スリッパを履くと、母親に誘導されるがままリビングへと通された。

これまたリビングもすごい内装だ。高級そうなシャンデリアや洋

風な骨董品、おまけに、動物の剥製まで壁から顔を突き出している。やわらかいソファに腰掛けた俺は、もてなされた紅茶をいただきますながら、娘の裕美が帰宅するのを待っていた。

ただ待つのも間が持たないので、俺は母親と少しばかり話をしてみることにした。

「このようなおもてなし、どうもありがとうございます。探偵が家まで来て話したいと聞いたとき、あなたは何も抵抗はなかったんですか？先ほどお電話した際も、それほど気になさらなかったようでしたから。」

俺は裕美の母親に、そんな素朴な疑問をぶつけてみた。

「そのことですか？ホホホ。」

彼女はなぜか、口元に手を宛ててほくそ笑んでいる。

「実はわたくし、探偵というご職業にとっても興味がありましたね。ぜひともお遭いしたかったです。でも、思っているイメージと違っていましたわ。」

「どんなイメージでした？もっと、ハードボイルドな男を想像していたとか？」

「ホホホ。お察しの通りで。」

俺と彼女はそんな他愛のない会話に苦笑していた。

テーブルの上にある大きな灰皿を目にして、俺はついタバコを口にくわえた。それを見た母親がどうぞと目配せしたので、俺は会釈しながらタバコに火を灯した。

「ふうー……。」

豪邸での一服は、いつもよりも高級な香りが漂う。そんなことを感じさせるほど、この家の豪華絢爛ぶりは目に余るものがあった。

タバコをちょうど灰皿に押し付けた頃、待ちに待った人物がようやくリビングに姿を現した。

「ただいま戻りました。あら、お客様？」

「おかえりなさい裕美さん。ごあいさつなさい。あなたにお話があったてお見えになられたのですよ。」

「え？わたしにですか？」

この親子は、いつもこんなまどろっこしい会話をしているのだろうか？聞いているこっちがむずがゆくなってしまふ。

「裕美さんですね？わたくし、藪鬼探偵事務所の藪鬼といいます。」

「まあ、探偵の方ですか？わたしにどういったご用件でしょう？」

娘の方はさすがに驚いているようだ。彼女は啞然とした表情のまま、俺の向かい側のソファ―に腰掛けた。

裕美は緊張はしているものの、姿勢を正して真剣な眼差しで俺を凝視している。

しなやかな髪の毛は、今時の高校生の割には珍しく、真っ黒で腰の辺りまで伸びている。

スリムで華奢な体つきや、落ち着き払ったこの態度は、すぐ側にいる母親とそっくりだ。“カエルの子はカエル”とはまさにこのことだろう。

「君は、クラスメイトの大林加奈さんの友人と聞いているが？」

「はい。加奈さんとは仲のよいお友達です。」

俺は相槌を打ちながら質問を進めていく。

「加奈さんが今、三日間ほど学校を休んでいることは知っているね？」

「はい。先生のお話では、風邪をひかれたそうで……。早く良くなって学校に登校してほしいです。」

加奈のことを心配するように、細長い眉を曇らせた裕美。

「裕美さん。実は加奈さんが学校に登校していない理由、それは風邪が原因じゃないんだよ。」

「え？それはどういうことでしょう……？」

俺の思わせぶりな話し方も手伝ってか、裕美の表情が一瞬で険しくなっていた。

俺は重要な情報を手に入れるため、できる限り本当のことを告げることにした。

「加奈さんは四日前に家出をしましてね。現在失踪中なんだよ。」

「まあ！」

裕美は怯えるように驚いていた。さっきまでと違い、表情からゆとりがすっかり消えてしまっていた。

「裕美さん、君は最近、加奈さんとよく遊びに行っていると、彼女の友人から聞いた。四日前、彼女が家出した日、君は彼女に遭っていないかな？」

「四日前ですか・・・。確か、わたし、加奈さんと一緒に原宿へ参りましたわ。間違いありません。学校帰りでしたので、時間は四時から四時半といったところでしょうか。」

裕美は動揺の顔を浮かべながらも、丁寧な口調でそう答えてくれた。

俺はシステム手帳を広げながら、どんどん質問を投げかける。

「そのとき、どこがおかしな様子はなかったかな？何か変な事を言っていたとか、見知らぬお店に行ったとか、知らない人物に話し掛けていたとか？何でもいいんだ。何かなかった？」

俺は逸る気持ちを落ち着かせようと、思わずタバコに手が伸びていたが、淑女の前では吸えないと何とか踏みとどまった。

「四日前は、それほど一緒にいたわけではなかったの、あまり覚えていないのですが。そうですね・・・。」

裕美は頭を横に傾けると、目を閉じたまま黙り込んでしまった。

四日前の記憶を必死に辿ってくれているのだろう。

「どうかな・・・？」

俺はささやくような口調で確認してみた。しかし、彼女の表情はこれといって変化がないままだ。・・・どうやらここまでのようだ。俺の脳裏にそんなセリフが思い浮かんだ。

実際のところ、とんとん拍子に手がかりが集まることは稀なことだ。少なくとも、ここまで辿り着けただけでも運がいい。

「裕美さん。もし思い当たらなかつたら無理に・・・。」

「あっ！！！」

俺はびっくりして仰け反ってしまった。ずっと考え込んでいた裕美が、目を大きくして大声を上げたからだ。

これにはさすがの母親も、俺と同様に驚愕な表情を浮かべていた。「ど、どうかしたのか？何か思い出したのか？」

さっきの大声とは違い、彼女はこれまで通りの丁寧な言い回しに戻って、思い出した事実を話してくれた。

「四日前、わたし途中で加奈さんと別れたのですが、しばらく歩いたところで、伝えなければいけないことを思い出したのです。」

裕美は加奈へ伝言を届けようと、身を翻して彼女のもとへと舞い戻っていったそうだ。

「そうしましたら、加奈さんは、わたしの知らない男性と一緒にいたのです。」

男性……。またもやこのキーワードが、彼女の口からも飛び出してくるとは。

この証言から、この男が加奈の失踪に何かしら絡んでいる可能性が高い。そうになると、この男の身元を洗う方を優先すべきだろう。

「裕美さん、その男の人相は覚えてるかな？特徴的な部分だけでもいいんだけど。」

「はつきりとは覚えていないのです。そのとき、わたしは加奈さんに声を掛けることを遠慮してしまったので……。」

その伝言というのも、それほど急ぐものではなかったこともあり、裕美は加奈に気兼ねして、近寄ることもなく立ち去ってしまったという。

それでも、その男性の顔はちらりと見かけたらしいので、少し時間をもらえれば思い出せるかも知れないと、裕美は申し訳なさそうに恐縮していた。

「わかった。もし何かわかったら、ここに連絡してくれるかい？」

俺はそう言いながら裕美に名刺を手渡した。

「はい。頂戴いたします。」

「では、俺はそろそろ失礼します。」

俺は快く協力してくれた二人にお辞儀をして、堅苦しい大豪邸を後にする。

おもむろに腕時計を目にすると、時刻はもう夕方近かった。もうこんな時間だったのか……。俺は時間が過ぎるのも忘れて聞き込み調査に没頭していたようだ。

今日は思った以上に収穫があったような気がする。

まず一つは、加奈の失踪した当日に一緒にいた男の存在。二つ目は、家出の原因が家庭内のトラブルによるものかも知れないということ。

この二つの手がかりを、何とか一つに結びつけることができれば、“テンパイ即リーチ”ってとこまで行けるんだが。

頭の中に麻雀牌を思い浮かべた俺は、一勝負楽しんでから事務所へ戻ることにした。

*

*

俺が事務所に帰ってきたとき、時刻はすでに夜七時を回っていた。まあ、ほんの少し寄り道したから仕方がないが。

夜の事務所には、いつになく生真面目に仕事をこなす鏡子さんの姿があった。今夜もまた残業してくれていたようだ。

「ただいま。鏡子くん、まだ仕事していたのか。」

「おかえりなさい、先生。手がかりの方はいかがでした？」

鏡子くんは自らの事務仕事より、俺の調査結果の方が気になるのだろ。彼女がもし、そのためだけに遅くまで残業していたとしたら、本当にご苦労さまと言わねばならない。

今日は思いのほか成果があったので、その結果報告をお疲れさまの言葉に代えることにしよう。

「今日は収穫があったよ。もう少しで、対象者の家出の原因がわかりそうなんだ。」

「家出の原因ですか？」

鏡子くんはキョトンとした顔をしている。

それもそうだろう。俺の仕事は原因を調べるのではなく、対象者の居場所を突き止めることなのだから。

「ああ。残念ながら、彼女がどこにいますかまではわかりません。いろいろ調べてみると、どうも対象者の失踪には男が絡んでいるようなんだ。」

「男性ですか。」

「しかも家出の原因そのものは、家庭内のトラブルのようなんだ。しかし、調査依頼をしてきた依頼人は、そんなこと一言も言わなかった。」

これまでに得た証言をもとに、俺は自分なりの推理を鏡子くんに話して聞かせた。

毎回ではないが、俺は少しでも調査が進んでいくと、このように鏡子くんにすべてを打ち明けている。ここで彼女がくれるアドバイスを反省すべき点は、俺にとっては調査を続ける上でとても役立つのだ。

「クライアントがそれをお話にならなかったということは、もしかして、家庭内のトラブルを知られたくなかった、ということでしょうか？」

「その可能性は俺も考えていた。だが今のところ、それを裏付ける根拠がまったくないんだ。」

「そうですか。」

鏡子くんはもどかしそうな顔のまま、再びパソコンの方へ向き直った。そして、パソコンを慣れた手つきで叩き始める。

「先生。わたし、もうすぐ前回の依頼の伝票処理が終わるんです。もしでしたら、その辺り、わたしの方で調べてみましょうか？」

「そうか。それは助かるよ。」

鏡子くんのその申し出は正直うれしかった。ただでさえ、俺一人の足を使った調査だけに、行動範囲も限られるし疲労感もそれなりに大きいからだ。

「明日、クライアントの自宅周辺で聞き込みしてみます。ご近所の

方々なら何か知っているかも知れませんかね。」

彼女も探偵事務所に数年いるせいか、調査の要点や方法については、いまさら俺が説明するまでもない。

どこに赴いて、どういうことを聞き込むか、彼女はもう調査のイロハは習得済みなのである。

「鏡子くん、ありがとう。」

「フッフ、何を言っているんですか？わたしもこの事務所の所員の一人ですよ。さて、仕事も落ち着きましたので、今夜はこれで失礼しますね。」

鏡子くんは色つぼく笑って、ショルダーバッグを肩にぶら下げると、事務所の玄関へと歩き出した。

「鏡子くん、お疲れさま……。」

俺はそんな彼女の小さい背中を玄関まで見送った。

彼女が出て行った後も、なぜか俺は、その場に立ち尽くしてしばらく呆けていた。

『リリリリーン……、リリリリーン……』

そんな俺の微熱も、一本の電話で冷まされてしまった。

鏡子くんのいなくなった事務所内に鳴り響くコール音。当たり前のことだが、俺以外に電話を取る人物はいない。

「もしもし？お待たせしました。藪鬼探偵事務所ですが。」

「夜分遅く失礼いたします。わたくし神鳴と申します。」

その声の主は、加奈の学校の担任である神鳴瞳であった。

「あ、先生ですか。どうかしましたか？」

「いえ。調査の方は進んでいらっしやるでしょうか？わたくしの伝えたことが、調査のお役に立てたかどうか気になったものですから……。」

声をわずかに震わせながら、行儀のいい口調でそう問いかけてきた神鳴。彼女も母親と一緒に心配性なのだろうか。

俺は少しでも安心させようと、彼女の協力がしっかり役立っていることを偽りなく伝える。

「まだ解決とは行きませんが、着々と調査は進んでいます。これもすべて、先生が協力してくれたおかげです。どうもありがとうございます。」

神鳴のホツとしたような吐息が、電話越しの俺の耳まで届いた。「それはよかったですわ。もし何か困ったことがあれば、何なりと連絡してください。早く加奈さんが見つかるよう、わたくしも努力します。」

俺は改めて神鳴にお礼をすると、ゆっくり電話の受話器を置いた。「心配している人達のためにも、明日はもっとがんばらないとな。」そうである。加奈の身を案じているのは、決して彼女の母親だけではない。担任である神鳴や、彼女の友人達も同様なのだ。

俺はその人達の願いを胸に、加奈を必ず見つけ出すことをかたくなに誓った。

時刻はまだ早めだったが、俺は明日に備えて今日一日の労働に終わりを告げるのだった。

調査三日目　く疑惑

調査三日目の朝がやってきた。

俺はベッドから起き上がると、自室の窓へと視点を向ける。カーテンの隙間から漏れる光加減で、今日の天気が穏やかな晴れだった。

寝ぼけ眼を擦りながら自室を出ると、いるはずの鏡子くんの姿はすでになかった。

俺の机の上には、細い文字で綴られたメモ紙が置いてあった。

「これから、クライアント宅周辺の調査に行つてまいります。何か連絡があれば個人携帯にお願いいたします。」

彼女が残したメモ紙にはそう書かれていた。

「ふう。鏡子くんは本当に行動が早いな。」

俺は流し台へと向かい、一人暮らしにちょうどいい大きさの冷蔵庫をそつと開けて、トマトジュースとフレンチサンドを取り出す。それらに乗せたトレイと共に、俺は自らのデスクへと移動した。

この俺にとって、いつもと変わらないのどかな朝食である。

「やはり朝食はこれに限るな。他のメニューなど考えられんよ。」

そんなこだわりに一人うなずきながら、俺はデスクに並んだ朝のご馳走を頬張っていた。

俺は朝食をいただきつつ、鏡子くんが机に置いておいてくれた朝刊を広げる。当然ながら、事件ネタしか目を通さない俺だ。

ちょうど三日前に目にした、渋谷での殺人事件の続報が載っている。よく見ると、被害者の少年の身元が判明したと書いてあった。

「ほう。せつかくだからチェックしておくか。」

俺は興味深く記事を読んでいた。

被害者の名前は中谷晋一郎。住所は渋谷区神泉町一丁目十番……。一年ほど前に……。私立高校を中退……。

「ん？この中谷の中退した高校って、加奈の通ってる学校じゃない

か。偶然つておもしろいものだな。」

続きを読んでもみると、その被害者は、渋谷を中心に活動していたチームに参加していたとのこと、か……。

俺は食後の一服を満喫しながら、この記事だけを食い入るように眺めていた。

「まったく、過去も現在も、若者達のやることはどうも理解できない。事件の発端はチーム内の揉め事か何かだろうな。」

俺は独り言のように、年寄りくさくそう嘆いていた。

昔の話ではあるが、渋谷や原宿で一時ブームになったチームと呼ばれる連中。彼らはだいたい十代の若者で構成されていて、その若さによる無鉄砲さから、暴行や強姦事件を起こし当時は随分話題になった。

実は過去に、俺はチームから息子を救ってほしいという依頼を受けたことがある。無論、それは俺にとっては些細な依頼だったが、これが思った以上に難航したのだ。

一度チームに参加してしまうと、まさにアリ地獄に迷い込んだアリのごとく、抜けるに抜けられなくなってしまっからだ。

抜けようとした者には、集団リンチやおとしまえを強要し、絶対に組織から逃がさないようにするという、まるで極道のような悪質さを持っていた。

結果的には何とか抜けさせることはできたが、とにかく苦勞をさせられた覚えが今でも記憶に残っている。

「ろくに叩くことはできないが、まあ、安らかに眠ってくれ。これがさらなる事件のきっかけにならないことを祈るばかりだな。」

俺はそつと目を閉じると、亡くなったこの少年にささやかな黙禱を捧げた。

チームの一人として、もし彼の性根が腐っていたとしても、やはり未来ある若者が命を失うことを、素直に喜ぶことなどできるはずもない。

俺はいたたまれない思いで、読み終えた新聞をきれいに折りたた

んだ。

『リリリリーン・・・、リリリリーン・・・』

そんな矢先に、事務所に鳴り響く電話の音。今は鏡子くんがいないので、俺の他に電話に出る者は誰もいない。

俺は仕方がなく、鳴り止みそうにない電話の受話器を取り上げる。

「もしもし？藪鬼探偵事務所ですが？」

「あれ、藪ちゃんか？」

電話の相手は、嫌って言うほど聞き飽きた声の持ち主だった。

「何だ助智か。こんな朝からどうかしたのか？」

さすがは朝の早いお寺の住職だけに、助智は朝から張りのある声を上げている。

「鏡子ちゃんはいないのかい？とうとう愛想尽かして出て行ったのかな？いよいよ俺のチャンスってわけだ。」

「何を言ってやがる。鏡子くんは今ちよつと外出中だ。だいたい愛想尽かすも何も俺達は夫婦じゃない。単なる仕事のパートナーだ。」

「ははは。毎回そう言ってるねー？そこまで否定すると逆に怪しく感じちゃうよ？」

「やかましい！」

どうせ助智のことだ。俺がこれ以上否んでも、どうせ難癖付けておもしろがるだけだろう。

「それより何か用事があつて電話したんだろ？何かあつたのか？」

「ああ、そうそう。実はね、ちよつと藪ちゃんの耳に入れておきたいことがあるんだ。」

助智の声がだんだんと小さくなっていく。これこそ内緒話モードである。

俺は電話を保留にしてから私室へと赴く。そして、私室に備えてある特殊な受話器に持ち替えた。

俺の持っているこの受話器は、盗聴防止機能の他にも、受話器から流れる声が周囲に漏れない工夫が施されていて、内密な会話をする際には重宝する代物なのだ。

「よし、準備いいぞ。」

完全な内緒話モードに突入しても、助智は決して大きい声を出そうとはしない。それは、お寺の方の設備が完全ではない理由もあるが、何よりも、助智自身がとても用心深いという性格もある。

ヤツのこの慎重さこそが、ヤツ自身の身の安全を確保しているとも言えるだろう。

「実はね、藪ちゃんが行方を追ってる女の子、確か大林加奈だった？ 彼女のことについてはぜんぜん情報がないんだけどさ。」

「おいおい、待てよ。対象者の情報じゃないなら、いったい誰の情報を手したんだ？」

「加奈の母親の方だよ。」

助智はやはり、俺の予想もしない情報を手に入れてくれたようだ。「これ当然、裏側からの未確認情報だけど、どうも加奈の母親はね、表以外の収入源があるっていう噂があるんだ。」

ヤツの言う裏側というのは、言うまでもなく裏の世界のことを指す。暴力団関係といった、表立って行動していない組織のことだ。

「詳しいことまでわかってるのか？」

「いや、残念ながらそこまではハッキリしてないけどね。」

助智の知る限りでは、加奈の父親は会社の社長だったそうだが、数年前に交通事故を起こして死亡しているらしい。その後、その父親の代わりに、母親が会社の社長を引き継いだそうだ。

俺は受話器を持ちながら、加奈の母親が記入した調査依頼書を確認してみた。よく見ると、職業欄には代表取締役社長と記されていた。

「それでその会社なんだけど、経営状態がよくないらしいんだ。まだ親父さんが現役だったとき、取引先で不当たりが出たらしくて、銀行から多額の緊急融資を受けてね、今もその返済に苦しんでいるみたいだよ。」

俺は助智の話を目にしながら、加奈の母親の家に電話したときのことを思い出した。

あときは確か、電話に出たのはメイドの女性だったはず。会社が銀行への返済に追われているくせに、悠長にメイドなんか雇っていたということか。

それに、あの母親の煌びやかな身なり……。あまつさえ、探偵に大金をはたいてまで調査の依頼をしてくるなど、普通に考えたらおかしい話だろう。

「なるほど。それはおもしろい情報だったな、感謝するよ。」

「お礼はいいからさ、温泉麻雀よろしく頼むよ?」

まだ覚えていたのか、コイツ。記憶力だけはたいしたもんだ。

「わかった、わかった。事件が解決したらな。」

俺は静かに、受話器の切断ボタンを押した。

「ふう……。」

俺はもやつとした頭をスッキリさせるため、火を灯したタバコを口にくわえた。そして大きく煙を吸い込み、三秒ほど溜めてから、思いつきり紫煙を吐き出した。

「加奈の母親の会社にまつわる疑惑……。このことが、加奈の失踪に関係するのだろうか?」

俺は頭を働かせながら、これまでの情報を一つに結びつけようとした。しかし、今の段階では結びつけることはできない。

あと少し、あともう少し手がかりが欲しい。俺は心の中でそうつぶやいていた。

「ちょうど、鏡子くんが加奈の自宅周辺で聞き込みをしているところだ。ここは彼女の帰りを待った方がいいかも知れないな。」

俺はとりあえず、自分の代わりに足を使った調査をしてもらっている、パートナーの帰りを待つことにした。

* *

事務所の窓から、赤く染まったきれいな夕陽が差し込んできた。俺はソファーに横たわりながら、リビングの壁に掛けてある時計に目をやった。時刻はもう夕方五時を回っていた。

「遅いな、鏡子くん。」

鏡子くんは、朝出かけてから一度も事務所に帰ってきていない。しかも、報告の電話の一本も入っていなかった。

俺の心の中に不安がよぎる。いくら調査のイロハを知っているとはいえ、彼女はごく普通の女性だ。その身を脅かす危険は男性よりも高いのだ。

「とりあえず電話してみるか。」

俺はいてもたってもいられず、彼女の携帯電話に電話してみることにした。

受話器を握ってダイヤルしようとしたその刹那、事務所の玄関のドアが開いたような音がした。

俺は素早く玄関の方へ目を向けると、少しばかり疲れた顔色をした鏡子くんの姿が見えた。

「遅くなつて申し訳ありません。ただいま戻りました。」

「鏡子くん……。おかえり、ご苦労さま。」

俺はふうつと胸を撫で下ろした。彼女が無事に帰ってきてくれたことに、俺の心がこの上ない安堵感に包まれた。

「先生、さっそく調査結果を報告したいんですけど、お時間よろしいですか？」

鏡子くんはなぜか、俺を急かしているようにも見える。彼女のその仕草を見る限り、それなりの情報を手に入れたのかも知れない。

「帰って早々かい？俺は全然構わないが、何かわかったのかな？」

鏡子くんはハンドバッグから手帳を取り出す。そして手帳をペラペラとめくつて、冷静な顔つきのまま報告を始めた。

「加奈さんのご自宅周辺で聞き込みを試みたんですが、どうも加奈さんと母親は、あまり仲がよくなかったそうです。よく自宅前で加奈さんと母親が口論しているところを、近所の人が目撃していました。」

鏡子くんのこの報告から、加奈の家出は家庭内トラブルが原因と見てよさそうだ。

「そうか。これで確信に近づいたな。他には？」

鏡子くんは淀みなく報告を続ける。

「あと加奈さんの父親のことですが、どうも四年前に交通事故で亡くなっているようでして。そのため、父親が経営していた会社ですが、現在は母親が代表取締役として引き継いでいるそうです。」

この辺りの情報は、今朝助智からも知らされていたものだった。

しかし、さすがは鏡子くんだけに、母親が代表を務める会社の名称が“太陽物産株式会社”というところまで調べてくれていた。

彼女のさらなる報告に、俺は黙って耳を傾け続ける。

「この会社は、海外と取引をする貿易関係の商社のようなようですが、実はわたしの調べた限りでは、この会社はあまり経営状態がよくないようでして。」

この辺りについても、助智が話していた内容と一致している。それでも、より詳しい情報をかき集めてきてくれたところを見ると、彼女は相当努力したに違いない。

俺はここまでの報告を聞いて、整理する意味も込めて彼女に再確認する。

「鏡子くん、すまない。親父さんが交通事故で亡くなった時期は、間違いなく四年前なんだね？もう一つだが、母親の経営する会社が現在、経営に行き詰っていることについてだが、他に何か聞いたことないかな？」

その確認に返答しようと、鏡子くんは手帳をさらにめくっていた。「はい。死亡時期ですが、お隣の方が葬儀に出られたそうで、それは間違いないそうです。あと会社の経営難の方ですが、念のため信用調査会社のデータベースを検索してみました。詳細はこの用紙にまとめてあります。」

鏡子くんはそう報告しつつ、俺にA四サイズの用紙を二枚ほど渡してくれた。その用紙には、加奈の母親が経営する会社の登記や業績、そして信用レベルなどが記載されている。

その用紙を閲覧していた俺は、ここ数年の売上推移に目が留まり、

そして、その信用レベルに驚きを隠せなかった。

「これは、びっくりしたな。」

俺の驚きの真意を知ろうと、鏡子くんも一緒になって用紙を覗き込んだ。

「どうかしましたか？」

「見てくれ。この売上推移だが、四年前から明らかにマイナス勘定が続いている。このままこんな経営が続いたとしたら、間違いなく資金難で倒産を余儀なくされるだろう。実際、信用レベルも危険度を暗示しているしな。」

「そうですね。しかし、信用レベルの低い資金難の会社は、この会社の他にもたくさんありますよ。何か気になることでもあるんですか？」

不思議がる鏡子くんは、俺はちよつとした質問をする。

「鏡子くん。君は今日、加奈の自宅を見てきたらう？どんな感じだった？」

質問の意図が見えないのか、戸惑いながら答える鏡子くん。

「は、はい。とてもきれいで大きなお家でしたよ。使用人らしき人も出入りしてましたし。会社社長のお宅ですから、それ相応かと。」

俺は自らが抱いている疑問点について、鏡子くんに問いかけながら打ち明ける。

「おかしいと思わないかい？経営する会社が火の車のくせに、そんな豪邸で優雅に暮らして、しかも、複数の使用人を今でも従事させている。さらに言えば、俺にお金をいくらでも払うから、娘を見つけてくれと頼んできた。」

いくら会社の危機とはいえ、娘を想う気持ちは理解できなくもないが、ただでさえ高額な調査費用をいくらでも払えるとは思えない。俺はそう持論を展開していた。

「はい、そう言われてみると、少しばかり変ですね。」

「自宅にいる使用人たちに、あの母親の豪勢な身なり。この物的状況を鑑みると、どうも何か裏があるような気がしないか？」

「裏・・・といいますと？」

鏡子くんは険しい表情で問い返した。

「まだ確証はないが、もしかすると母親には、会社以外からの収入源があるのかも知れない。」

「まさか、裏金ですか？」

このまさかの展開に、鏡子くんは目を大きくして驚いていた。

「もう少し具体的に下調べが必要だがね。まだ物的証拠がない以上、それに確信を持つわけにはいかない。」

「わたし、そこに重点をおいて調査しなおしてみますね。では、さっそく。」

鏡子くんは着ていたカーディガンを脱ぎ捨てると、意を決したように自らのデスクへと腰掛ける。

彼女は素早い手つきでパソコンの電源を投入し、姿勢を正しながらパソコンが起動するのを待ちわびていた。

「さすがに早いね。でも少しぐらいは休憩するといい。」

「心配ご無用ですわ。パソコンもきつと仕事したがつてますからね。」

俺はいつも、彼女のパソコンテクニクには助けられている。

より必要な情報や詳しい情報が欲しいとき、彼女のパソコンが何よりも頼りになるのだ。そんな彼女のためにも、最先端のパソコンを買ってあげなきゃいけないかも知れないな。

俺は詳しくは知らないが、どうもインターネットのチャットとかいうサイトで調べているそうだ。俺には何のことなのかさっぱりだ。『リリリリン・・・、リリリリン・・・』

事務所の静かな空気を引き裂くように、一本の電話がやかましく鳴り響いた。

鏡子くんは、デスクの上にある受話器をとっさに持ち上げる。

「もしもし？ 藪鬼探偵事務所でございます。・・・はい、お世話になります。・・・ええ、おります。少々お待ちください。」

電話を保留にすると、鏡子くんは俺の方に顔を向けた。

「先生。高塚裕子さんという方からお電話です。」

「高塚……。ああ、彼女か。」

高塚裕子。そういえば加奈の親友の一人で、礼儀正しく姿勢のいいお嬢様のような女の子だったな。

俺は咳払い一つしてから、受話器を受け取って通話ボタンを押下した。

「もしもし？藪鬼だが？」

「あ、探偵様ですね？わたし、先日お目にかかってお話しました高塚裕子と申します。」

裕子は予想を裏切らず、行儀よく丁寧なあいさつをした。とはいえ、俺のことを“探偵様”と呼ぶのもどうかと思うが……。

「電話をくれたってことは、あれから何か思い出したのかい？」

「はい。あのとき加奈さんと一緒に緒されていた男性のことなんですけど、つい今しがた、その人のことがわかりましたので報告をと思ひまして。」

裕子からのびっくり発言に、俺の鼓動が一瞬で激しくなった。

「それは本当か？その男は、いったい何者なんだ！？」

俺は感情が高ぶって口調が荒くなっていた。それもそのはずで、これまで会話に出てきたキーワードの正体を、ついに知ることができるからだ。

「それがですね……。」

どういうわけか、裕子の口調がおぼつかない。まるで、これから話すことを誰にも聞かれないかのように。

「探偵様は、三日前に起きた殺人事件をご存知ですか？渋谷で一八歳の男性が刃物を突き刺されてしまって殺害された、という事件です。」

「あ、ああ。知ってるよ。」

俺は次の瞬間、顔面が凍りつく感覚を覚えた。

「ま、まさか……。」

俺はその直後、裕子から思いも寄らない事実を聞かされることに

なる。

「殺害された男性なのです。あとき、加奈さんと一緒にいた男性というのは……。」

何と言うことだ……。加奈の失踪に絡んでいた男の正体が、俺が何気なく目にしていていた殺人事件の被害者だったとは。

「……間違いないのか？」

「……はい。夕方のニュースで写真が映った際、はっきりと思い出したのです。間違いありません。」

俺は受話器を握り締めたまま、しばらく呆然と立ち尽くしていたが、こんなことで我を失っているわけにはいかない。

俺はこの事実を受け止めて、冷静な行動をとる必要があるのだ。

「貴重な情報をありがとう。また何かわかったら電話してくれ。」

俺はそう礼を告げると、受話器の切断ボタンを押下した。

このただならぬ雰囲気を感じてか、鏡子くんがすぐさま俺に声を掛けてきた。

「どうかしたんですか？何か問題でも起きましたか？」

俺は険しい表情のまま、机の上に無造作に置いてあった新聞を彼女に広げて見せた。

「この事件記事を見てくれ。三日前、渋谷で起こった殺人事件の十八歳のこの被害者が、どうやら加奈と関わりのある人物のようなんだ。」

「え、それは本当ですか？」

鏡子くんは動揺しながら、その事件記事を食い入るように凝視している。

「……こんな事件が。」

俺は胸ポケットからタバコの箱を取り出し、天を仰ぎながら一本のタバコを口にくわえる。

「そこにも記載されているんだが、その事件の被害者が中退する前に通っていた学校、実は加奈が通っている学校なんだ。」

「なるほど……。つまり加奈さんとこの被害者は、同じ学校とい

う接点があつたんですね。」

俺は口をつぐんだまま軽くうなずいた。

「参ったよ。この失踪の最大の手がかりとなる人物が、すでにこの世にいないとはね。これで調査は振り出しってわけさ。」

「・・・。」

落胆する俺を氣遣つてか、鏡子くんは何も声にしようとはしない。ただ黙つて、俺からの指示を仰いでいるようだった。

「いや、これで終わりじゃない・・・。」

俺はふと氣付いた。何もこれで、すべてがやり直しと言うわけではないと。

ここまで手に入れた手がかりは、すべてが無駄ではないはずだ。これしきのこととで、鏡子くんまで落胆させるわけにはいかない。

こういつた行き止まりから活路を見出すこそが、俺のような超一流の探偵と言えるのだ。

俺は思いついたように、鏡子くんに向かって血氣盛んに指示を出した。

「鏡子くん、すまないがもう少し残業してくれ。これからこの被害者について徹底的に調べるんだ。どんな些細な情報でも構わない。よろしく頼むよ！」

鏡子くんは唐突のあまり啞然としていたが、俺の指示の意図を理解した途端、自信満々の笑顔で快諾してくれた。

「はい、まかせてください。わたしのインターネット検索で見つけられない情報はありません。少しだけお時間をください。」

彼女はガッツポーズでやる氣を示すと、ものすごい速さでパソコンを操作し始めた。

そんな彼女の勇姿を見ると、つくづく仕事上のパートナーでよかったと思う。さっきのガッツポーズは、自信がなければ出来ない行為だろう。どうやら俺は安心して待っていられるようだ。

「先生！これを見てください。」

「もう何かわかったのか？」

俺は鏡子くんに促されるがまま、パソコンのディスプレイを見つめた。

そのディスプレイには、カラフルな色で制作されたホームページらしきものが表示されている。くまなく見据えると、被害者の名前である“中谷晋一郎”の文字が記載されていた。

「鏡子くん、これは？」

「このサイトには、渋谷で活動するチームがいくつも記載されています。この“渋谷ラッキースター”というリンクを辿ると・・・。」
彼女はマウスを手際よく扱い、その先にあるホームページを呼び出した。

「見てください。被害者の中谷が参加していたチーム、渋谷ラッキースターのホームページです。大手のプロバイダーへホームページを設置していますね。アクセスカウントもまずまずといったところかしら。」

俺は知ったかぶりして、彼女の話に真顔でうなずいていた。

「どうやら管理人は面倒くさがりな性格のようですね。まだ中谷のことを残したままにしていますから。そのおかげで、検索が早くマッチした点では運がよかったです。」

彼女の口から出てきたインターネット用語を、俺は果たしてこのまま鵜呑みにしてもいいのだろうか？

俺は昔、まだ麻雀を覚えてた頃の頃、友人が教えてくれた嘘のテクニクを鵜呑みにしてしまい、大負けした経験がある。

振り返ってみると、とても悔しい思い出の一つだが、今はそんなことはどうでもいい。

とりあえず俺は、鏡子くんのマウス操作に従うままに、中谷のいたチームの詳細を参照していった。

「なるほどな。このチームのメンバーに接触してみる価値はあるようだ。もしかすると、加奈のことを知っているヤツがいるかも知れない。」

「そうですね。先生は、その辺りから当たってみたらいかがですか

？」

何はともあれ、鏡子くんの努力によって明日への活路を見出すことができた。彼女には本当に感謝せねばなるまい。

「明日また渋谷へ行ってみるよ。申し訳ないが、君は明日は、事務所で留守番をしてくれないか。何かわかり次第、すぐ調べてほしいことがあるかも知れないからね。」

「・・・は、はい、わかりました。」

鏡子くんは少しだけ表情を曇らせていた。

調査報告をするさっきの姿からして、彼女はやはり、現場調査に行きたい気持ちが強いのだろうか。

「鏡子くん、本来は調査に行ってもらいたいところだが、ここはガマンしてくれ。現場調査は危険を伴うことにもなる。万が一、君に何かあったりしたら一大事だからね。どうかその辺の事情、わかってくれないか？」

俺の切実な説得を受け入れた鏡子くんは、前日と同じく可憐な笑みをこぼしてくれた。

「わかっています。ご心配いただいて、とてもうれしいですわ。」

彼女の魅惑な仕草を目にすると、俺の理性がどこかに吹き飛びそうになってしまう。しかし、彼女はあくまでも仕事上のパートナー、間違ってもそんなことを想ってはいけない。

俺は頭に浮かんだ雑念を、見えないトンカチで叩き壊していた。

「先生。わたし、そろそろ失礼しますね。明日はいつも通りに事務所へ来ますので。それでは、おやすみなさい。」

鏡子くんはそういういい伝えと、芳しい香水の香りを漂わせながら事務所を後にした。

俺は不本意ながらも、その日の夜、何とも不謹慎な夜を迎えることになってしまった・・・。

調査四日目　　最後のメール

調査を開始してから四日目となった。俺は今回の調査で三度目となる、若者の街渋谷を訪れていた。

加奈と何かしら関わっていたはずの中谷晋一郎。そして彼が参加していたチーム、渋谷ラッキースター。俺はそのチームのメンバーに接触を試みるつもりだ。

メンバーであれば、加奈のことを知っているだけでなく、運がよければ、居場所までも把握しているかも知れない。

「うだうだと口うるさく言われるのも御免だ。よし、調査を開始するか……。」

まったく困ったものだ。昨日の夜も、依頼人である加奈の母親から事務所へ電話があった。

さも以前と同じく、娘は見つかったのか、どこまで進んでいるのか、明日の調査はどこへ行くのかなど、矢継ぎ早に問い詰められててんてこ舞いである。まるで、俺が彼女に調査されているような気分だ。

無論、家庭内トラブルや裏金といった疑惑については、彼女にいつさい触れていない。それは物的証拠がないという理由もあるが、あまり深く追求してしまうと、この調査を途中で放棄されないとも言えないからだ。

俺は差し当たり、渋谷ラッキースターがよくたむろする場所について聞き込むことにした。

そんな俺が訪れたのは、加奈の行きつけの店だった衣料品店である。

「あれ？探偵さん。」

店内に入ってきた俺の存在に気付いたのは、やけに金髪とあごひげが似合うこの店の店長であった。

「何度も申し訳ない。また少しばかり聞きたいことがあって。」

店長は嫌な顔一つせず、俺に快諾の返事をしてくれた。前回と同じく、俺は店の奥にある控え室へと通された。しかも、今日はおかきと番茶付きである。

「それで、今日はこういった件ですか？」

そう促された俺は、渋谷ラッキースターを知っているかどうか店長に尋ねてみた。

「ああ、名前ぐらいは知ってるけどね。さすがにどこでたむろっているかまでは、わからないですね。」

「そうか・・・。」

俺はくわえたタバコに火をつける。すると、店長が手を揺すって何かを訴えかけてきた。どうやら、タバコ一本お恵みを、のサインだったようだ。

俺はタバコの箱を店長に向けて差し出した。それだけではなく、彼がくわえたタバコに火まで灯してやった。

「ふう・・・。」

おいしさを顔で示しながら、恵んでもらったタバコを吸っている店長。

「お、そうそう。アイツなら知ってるかもな。」

「アイツ？」

店長はタバコのお礼なのか、俺に続きを話してくれた。

「ウチのバイトなんだけどね、どうも昔チーマーだったらいいんです。アイツならラッキースターのこと知ってるんじゃないかなあ。」

「それで、そのバイトは今？」

店長は室内の隅にある戸棚の引出しから、シフト表と書かれた帳面を取り出した。そのシフト表には、アルバイト全員の勤務時間帯が記してあるそうだ。

「おおラッキーですね。今日は勤務が入ってますよ。たぶん、もうすぐ出勤すると思うから、来たら連絡しますよ。」

彼の言う通り本当にラッキーだった。こういう商売をやっていると、とんとん拍子に事が進むことはあまり多くはない。幸運がやつ

てくると、後から不運がやってきそうで怖い気もする。

「それは助かるよ。それじゃあ、この番号へ電話してくれ。」

店長に自らの携帯電話の番号を伝え、俺はいったん店を離れることにした。

「さてと……。どうやって時間を潰すかな。」

俺は歩き始めると同時に、胸ポケットから愛用のマイルドセブンを取り出そうとする。

「あれ？」

どうやらタバコが切れているようだ。

俺は周辺を見渡して、タバコの自動販売機がないか探してみた。しかし、こういうときに限って、目的のものは見つからないものである。

「困ったな。タバコの販売機はどこだろう？」

街角にある無数の自動販売機。そのほとんどが、ジュースやコーヒーといったドリンク類の販売機だ。

買う者がいるから売る機械もあるのだろうが、これほどの自動販売機が本当に必要なのかと、俺はときどきそんな不毛なことを考えてしまう。

しばらく彷徨い続けること数分。俺はようやくタバコの自動販売機らしきものを発見した。

俺は猛ダッシュで、その自動販売機まで駆けつけた、が……。

「おいおい、マイルドセブンが売り切れてるじゃないか。」

寄りにもよって、俺の愛用するマイルドセブンが売り切れとはまったくもってついていない。もしかすると、さっき頭に浮かんだ不運とはこのことだったのだろうか。

自動販売機の前で呆然とする俺に、背後から何者かが声を掛けてきた。

「あの、タバコ買われますか？」

俺がとっさに振り向くと、そこにはタバコを詰め込んだダンボールをかついだ青年が立っていた。この格好からして、この自動販売

機で売っているタバコの配達業者のようである。

「マイルドセブンはないか？あれば一個買いたいんだが。」

俺の青くなった顔がはじめに思えたのか、その青年は配達車へと
んぼ返りして、タバコがあるかどうか確認してくれた。

「えーと、マイルドセブン、マイルドセブンと……。あれ、確か
あったと思ったけどなあ。」

「もしかして、ないかな？」

俺は内心ハラハラしつつ青年の側に近づいていく。

配達車の中を覗いてみると、日本産のタバコだけではなく、海外
から輸入されたタバコもたくさん積み重ねてあった。これだけの銘
柄があると、特定のタバコを探しだすのは至難の技かも知れない。

「やっぱりいいよ。他のところに行くから。」

青年に迷惑を掛けたことを申し訳なく思い、俺がそう声を掛けて
立ち去ろうとした瞬間、ある文字が俺の網膜に焼きついた。

「ん、これは……。」

その文字とは、外国産タバコの箱に記載されている会社名で、驚
いたことに、加奈の母親が経営する太陽物産だったのだ。

詳しく見てみると、その会社名は輸入販売元となっている。とい
うことは……。

「あ！ありましたよ、マイルドセブン。」

青年は額の汗を拭いながら、俺にマイルドセブン一個を手渡して
くれた。

「わざわざありがとう。これ二五〇円。」

その青年はさわやかな笑顔で、さっきの自動販売機まで戻ってい
った。

そんな彼を見送った後、俺はもう一度、外国産タバコの箱に書か
れた太陽物産の文字を見据えていた。

「たしか、太陽物産は貿易関係の会社だったな。なるほど、海外の
タバコを日本へ流通させていたのか。」

俺はそのとき、眉をひそめるような怪しき悪行が頭に浮かんでい

た。

「確かめてみる必要はあるな。」

俺は携帯電話を握り締めて、事務所で待機している鏡子くんへ電話した。

「もしもし鏡子くん、悪いがすぐ調べてほしいことがあるんだ。」

「はい。何でしょうか？」

俺のお願いを聞き入れた鏡子くん。電話の向こうから、カタカタとパソコンのキーボードを叩く音が聞こえた。

「加奈の母親が経営する会社は、貿易関係の会社だったな？そこを取引している国、あと扱っている商品をすべて洗ってくれないか？ちよつと気になることがあるんだ。」

「かしこまりました。わかり次第、ご連絡差し上げた方がよろしいですか？」

「ああ、できればそうしてくれ。じゃあ。」

俺はそう言つて携帯電話を切った。そして、頭に浮かんでいた悪行のシナリオを心の中でつぶやく。

「会社の取引ルートを通じて、海外からヤバイものを日本に流しているのかもな……。例えば、拳銃、麻薬。それを日本のブローカーに横流しして、その報酬を裏金として受け取る。」

俺はこのとき、そんな物騒なことを頭の中で思い描いていた。それと同時に、考えたくないことまで脳裏を過ぎった。

「……まさか加奈は、その事実を知ってしまったのでは？秘密を知つてしまい家を飛び出した加奈。その秘密を守るために、彼女の足取りを追う母親。」

俺はさまざまな展開を考えながら推理していく。

「いや、もしそうだとしたら、加奈は警察に駆け込むなりして保護を請うだろう。彼女だつて一七歳、そのぐらいの判別はつくはずだ。……まだ真相は暗闇の中つてところか。」

何より論理的証拠よりも物的証拠が必要だ。俺はそう自分に言い聞かせて、この場から歩き出そうとした。

『プルルル・・・、プルルル・・・』

その瞬間、携帯電話が忙しく鳴り出した。発信番号を見ると、衣料品店の店長からの電話だった。

俺はすかさず通話ボタンを押した。

「ああ探偵さん？俺です。」

店長から、アルバイトが店に来たことを伝えられた俺は、足早に衣料品店に向かって駆け出した。

疾走すること数分後、俺は衣料品店まで戻ってきた。

俺が慌しく店内へ入ると、店長は来店客に迷惑をかけないように、声を出さずに手だけで合図してくれた。それは、いつもの奥の控え室に進んでくれ、と伝える合図のようだった。

俺も声を出さずに手でお礼をすると、もうすっかりお馴染みの奥の控え室へと進んだ。

「ども。」

控え室で俺を待っていたのは、まだ十代の若い青年だった。

短く刈り上げた真っ赤な髪の毛、耳にはピアスを装飾し、顔に軽めの化粧までしている。

俺はその姿に思わず、彼の両親はこれを容認しているのだろうか？と、他人事ながら心配になってしまった。

「よろしく。俺は藪鬼だ。悪いが何点か質問に答えてくれ。」

「いいっすよ。」

俺は相手がどんな人間であろうが、いつも通りの姿勢で質問をする主義だ。例えこの青年のように、見た目や感性に隔たりがあったとしても。

「君は渋谷で活動するチーム、渋谷ラッキースターのことは知ってるな？そのメンバーだった中谷という男が、この前渋谷で殺害されたことも？」

青年は顔をうつむかせて、弱々しい声を漏らした。

「ああ、もちろん知ってるさ。俺と晋一郎はチームこそ違っただけ、昔からのマブダチだったんだ。殺されたと聞いたときはメチャクチャ、ショックだったよ……。」

これは驚いた。まさかチームだけではなく、中谷本人とも面識のある人物に出会えるとは思ってもみなかった。

「そうだったのか。友人が殺されたんじゃ、さぞ辛いだろう。君の気持ち、痛いほどよくわかる。俺は探偵という立場だが、殺した犯人を何とか見つけたい。協力してくれ。」

俺は同情するような言葉遣いで、落胆している彼を少しずつでも元氣付けようとした。

こんな些細なことでも、相手は心を許して情報を語ってくれるものなのだ。重要な手がかりを入手するためには、多少なりとも、相手の気持ちに立ってあげるのも大切なのである。

「渋谷ラッキースターのメンバーについて教えてくれないか？例えば、彼らがどこにいるのか、どこによく集まっているのか、そういったこと何か知らないかな？」

青年は考える仕草も見せず、持っている情報を包み隠さず俺に吐露してくれた。

「連中、今は渋谷より代々木で集まっているよ。夜七時過ぎに代々木公園に行ってみなよ。ラッキースターのリーダーがさ、実は代々木に住んでるんだ。」

彼曰く、渋谷ラッキースターのリーダーは橋本恭介という男で、話のわかる男気のある人物だという。リーダーだけに、自分よりは事件のことに詳しいだろうとのことだった。

「そうか。わかった、今夜にでも行ってみるよ。」

俺は持ち歩いているシステム手帳に、彼の教えてくれた重要なデータをしっかりと書き留めた。

俺は参考までに、加奈を知っているかどうかも彼に聞いてみることにした。

「すまないが、君は大林加奈っていう女の子を知らないか？年は中

谷晋一郎の一つ下で一七歳なんだが。」

俺はそう問いかけつつ、微笑む加奈が映っている写真を見せてみた。

「・・・。」

彼は首を大きく横に振った。どうやら名前すら聞いたことがなかったようだ。

加奈に関する情報を収集するには、やはり代々木まで足を運んで、渋谷ラッキースターに接触する他ないだろう。

「どうもありがとう。助かったよ。」

「いや・・・。探偵さん、犯人、早く見つけてくれよ。」

青年は目頭を熱くしながらそう訴えると、仕事のために控え室を出ていく。そんな彼に向かって、俺は任せておけと真剣な目で約束した。

ちょうど、俺が控え室を立ち去ろうとした瞬間、店長がもの思わしげな顔を覗かせた。

「どうです探偵さん。アイツ、何か役に立ちました？」

俺はゆっくりと店長の側まで歩み寄り、彼の肩にそっと手を置いた。

「店長、いろいろとありがとう。おかげで進展があったよ。」

「そうか、それはよかった。早いところ加奈ちゃん見つけてあげてくださいよ。」

協力してくれた青年、そしてこの店長のためにも、一刻も早く加奈を見つけ出さなければ。そして、中谷晋一郎の事件についても、俺なりに解決できれば言うことないんだが。

店長の穏やかな笑みに見送られながら、俺はお世話になった衣料品店を後にする。

「おっと？」

俺が外に一步足を踏み出したその刹那、何ともタイミングよく、携帯電話がブルブル震えだした。さっきの聞き込みの際、マナーモードにしていたせいだ。

鏡子くんからの電話と確認し、俺は急いで通話ボタンを押した。
「もしもし？鏡子くんだな。頼んだ件だね。・・・ああ、教えてくれ。」

彼女が調べてくれた結果報告に、俺は心を落ち着かせて耳を傾けた。

「わたしが調べた限りですが、太陽物産と取引している国は、アメリカ、メキシコ、ブラジルの三カ国、そしてアジアの小さな国が数ヶ所です。扱っている商品はタバコだけですね。」

「タバコのみ、か。それ以外はないんだね。」

鏡子くんは念を押すように補足してくれた。

「ええ、間違いありません。会社概要にはそう記載されています。外国産タバコを輸入して、日本の流通会社までの販売を基本業務としています。」

次の瞬間、鏡子くんはバツが悪そうに言葉を濁らせた。

「・・・あの、実はパソコンで少しだけ試みたんですが、どうも気になるものを見つけまして。」

彼女曰く“試みた”というのは何か？それは彼女ならではの特技、そう特定のコンピュータへ侵入する行為、いわゆるハッキングである。

「何を見つけたんだ？」

「太陽物産のサイトを辿って、サイトを設置しているサーバを覗いてみたところ、メールサーバ上に、メールデータが一部残っていたんです。」

残念ながら、解析の途中に自動削除されてしまったので、詳細までは掴めなかったそうだが、文章として読める部分があると、鏡子くんは神妙に話していた。

「その部分を読んでくれるか？」

鏡子くんは手紙を読むような口調で、俺にその文章をゆっくりと読み上げる。

「タイトルなし、宛先はsendai。本文、リストはまだ発見で

きず。目下確認中。次の日取りには必ず間に合わせる……。ここ
までです。」

「リスト？いったい何のことだろう？あと、sendaiという宛
先は誰のことかわかるかい？」

「いいえ。メールアドレスまではわかりませんでした。しかし、s
endai宛てに送信をしているので名前に間違いないと思います。
この辺りはもう少し調べてみますね。」

それにしても、鏡子くんはこの手の調査を始めると留まるところ
を知らない。俺が立ち入ることのできない分野だけに、否定も肯定
もできないのが現実なのだ。

「そうしてくれ。あと、あまり無茶はしないように。ハッキングは
いくら探偵でも違法行為だからね。」

「はい、わかっています。先生もあまり無理せず、寄り道なんてし
ないで戻ってきてくださいね。」

「ああ、また電話するよ。」

俺は苦笑しながら電話を切った。そして時計をチェックすると、
時刻はまだ正午前だった。

渋谷ラッキースターに遭うため、俺は代々木に行かなければなら
ないが、さすがに今からではあまりにも早すぎる。

俺は時間潰しをかねて、助智のところを訪ねてみることにした。
もう少し、ヤツの情報網の助力を得るためだ。

俺は淡い期待を胸に、ヤツのもとへ足を向けていた。

* *

「へえ、それじゃあそこそこ進んでるじゃないの。」

「まだだ。これから接触するヤツらが加奈のことを知らなかったら、
今度こそ本当に調査が振り出しに戻っちまう。・・・よし、これで
どうだ。」

「うーん、まあ、そうだろうけどさ。・・・よっと！」

「とにかく今夜、ヤツらから必要な話が聞けることを祈るしかない

つてわけさ。・・・お、それいただきだ。」

「あ、何だよ藪ちゃん。また萬子狙いかよ？」

渋谷ラッキースターとご対面する夜までの間、俺はひとまず助智のいる高笠寺で時間を潰していた。え、何をしているかって？聞くまでもないだろう、そんなこと・・・。

「ところで助智。ちよつといいか？」

俺はただ休んでいるわけではない。助智からいろいろと聞くことがあったのだ。

「なんだい？この勝負は負けないう。」

「この勝負のことじゃない。調査のことで聞きたいことがあるんだ。」

助智はいいよと言って、手牌をまじまじ見ながらうなずいた。

「今回の依頼人、加奈の母親が経営している会社だが、何かヤバイものを扱っているっていう噂はないか？例えば、拳銃とか、麻薬とか。」

助智は掛け声と共に、雀卓に捨て牌を叩きつけた。

「ああ、例の裏金の絡みだね？それについては、俺もそっち方面の人にちらつと聞いてみたけどね。・・・確かに怪しい面もあるんだけど、これだっていう証拠がないんだよ。悪いね。」

「そうか。」

俺は手牌をじっくりと眺めながら、マイルドセブンをそつと口にくわえた。

助智は余裕の笑みを浮かべながら、俺が捨て牌を切るのを待ちわびている。

「何か新しい情報もないか？」

俺は字牌を切り捨てながら助智に尋ねた。

「うーん、そうだね・・・。」

助智は腕組みしながら、俺の切った字牌を見据えている。

新しい情報を思い起こそうとしているのか、それとも字牌をポンしようとしているのか・・・。コイツの思考回路だけはまったく判

別できない。どうでもいいが、さっさと行動を起こしてほしいところだ。

「これポンね。」

この野郎、やっぱりそつちのことを考えてやがったか。

「情報の方はどうなんだよ？」

俺はタバコの煙を思いきり吐き出し、苛立つようにまくし立てる。
「わかってるよ、そんなに急かすなって。思い出してる最中なんだからさ。」

助智は二枚減った手牌を長々と見つめて、どれを捨てようか迷っているようだ。コイツ、本当に小突いてやろうかと、俺は率直にそう思ってしまう。

「そうそう思い出した。あの会社の取引先に関するちょっとした情報があったんだ。」

待望の情報をようやく口にした助智。

「どんな情報だ？」

「あるところから聞いたんだけど、太陽物産の取引先の中でね、一社だけ商品売買してない会社があるんだ。」

「商品売買をしていない取引先？それは確かに妙な話だな。」

鏡子くんからの話だと、太陽物産は海外タバコを輸入して、国内の流通会社に卸しているはずだ。商品を卸さない売買とはいったいどういうことだろう？

「その取引先の詳細はわかってるのか？」

ここまで来ても、助智は未だに何を捨てるか迷っている。いい加減に早く捨てやがれ。

「・・・えっとね、株式会社エドワールドだったかな。所在地は確か品川だったよ。」

「そうか。」

俺はシステム手帳を手にするなり、助智からの情報をしっかりと書き留めた。

「しかし、商品を取引していないのに、どうして取引先とわかった

んだ？」

「よくぞ聞いてくれた！」

助智はいきなり目を輝かせて、誇らしげに語り始めた。

「この話さ、俺が贖身してる銀行員から聞いたんだ。そいつがね、たまたま太陽物産の融資に携わったことがあって、そのとき、取引先や仕入先、あと扱っている商品なんかを調べたことがあったんだって。」

「なるほど、そうしたらこのエドワールドという会社に辿り着いて、しかも取引しているものが商品ではないと知ったわけか。それで、その会社とはどういう取引をしてるんだ？」

助智はいかにも不審げな顔つきで声を漏らす。

「いやね、これがまた不明瞭でさ、報酬委託手数料という名目でやり取りしているらしい。平たく言えば、形のない商品を取引してるってとこだね。」

助智は話し終わると、悩み続けた捨て牌を雀卓へと切り捨てた。

「わかった。いい情報ありがとう。」

俺は助智にお礼を言いながら、たった今捨てられた牌を手にする。

「ロンだ。」

「へー！？」

「タンヤオ、ピンフ、ドラ二で満貫だ。」

定番でかつ、見事なまでのきれいな役が完成した。

助智はわめきながら、ボディビルで鍛えた両腕を振り乱して悔しがっている。

「くっそお！そんな待ちしてるなんて汚ねえな。だから二人打ちはキライなんだよお、もう！」

助智は一万二千点の点棒を雀卓へ投げ捨てると、積み重なっていた麻雀牌を投げやりに崩していた。

それにしても、寺社の本殿にある仏様の前で、堂々と雀卓を囲む俺達もいかなものだろうか。

その本殿の片隅に無造作に置かれている、ぶら下がり健康器やダ

ンベルを見たら、さぞ檀家さんも悲観の眼差しを向けるに違いない。
「さてと、俺はそろそろ行くよ。事務所にも寄らなきゃいけないしな。」

「何い？勝ち逃げする気か？それはないよ。もう一勝負やろうよ、藪ちゃん！」

手を合わせる助智を尻目に、俺は颯爽と上着を羽織り始めた。

「別に逃げはしない。今度来たとき、この勝負の続きをやればいいだろ？それじゃ、またな。」

「ちえ、わかったよ。なるべく早くやろうね。」

助智は不平不満を口にしながらも、出て行く俺を見送ってくれた。そして俺は、この足でいったん事務所へ戻ることにした。

加奈の母親が送った不審な電子メールについて、鏡子くんが何か掴んだかも知れない。そして助智が話していた、株式会社エドワールドという取引先のこと、彼女に調べてもらう必要がある。

助智と別れてから一時間ほど。JRと私鉄を乗り継ぎ、俺は我が事務所へと帰ってきていた。

「おかえりなさい。どこか寄ってこられたんですか？」

俺の帰りを迎えてくれた鏡子くんは、パソコンに向かって積み重なっている経費の伝票処理をしていた。

「ああ。ちよつと助智のところへ寄ってきたんだ。」

「佐倉さんのところへ？佐倉さんはお元気でしたか？」

鏡子くんと助智は面識はあるものの、それほど親しいわけではない。ほとんど電話で会話する程度で、遭ったりする機会は少ない。それにも関わらず、助智はどうも鏡子くんに気があるようで、やたらと事務所に來たがる。まあ、俺はいつも理由を付けて拒んでいるのだが。

「ああ、アイツは相変わらず元気だよ。」

「そうですね。・・・フフフ。」

この鏡子くんのくすくす笑いに、俺の心がなぜか揺れ動いてしまった。“アイツのことが気になるのか？”と聞いてみたいが、あからさまに答えを聞くことにも抵抗がある。

そんなことよりも仕事だ。俺は雑念を振り払い、自分らしからぬ嫉妬心をはぐらかしていた。

「それより鏡子くん。あのメールについて何かわかったかい？」

鏡子くんは首を横に振って、困惑した表情を俺の方に向ける。

「すみません。あれから試行錯誤、調べてはみたんですが、sendaiについてはまだわかっていません。通信ログからして、メールを送信したのは間違いないんですが、メールそのものはもう受信されて、サーバ上には残っていませんでした。」

「そうか。まあ、仕方ないだろう。」

俺は上着からシステム手帳を取り出し、さつき助智から教えてもらった情報を引き出す。

「鏡子くん、もう一つお願いがあるんだ。株式会社エドワールドという会社の詳細を調べてくれるか？」

「かしこまりました。株式会社エドワールド……ですね。」

彼女は手早くインターネット検索を実行する。俺はそんな彼女のデスクの側へと歩み寄った。

「あら？オフィシャルサイトはないのかしら？」

「どうということだ？」

インターネット初心者の俺に、鏡子くんは講師のごとくわかりやすく説明してくれた。

「エドワールドという会社、公式のホームページがないようです。

このご時世に、サイト運営しないのは珍しいですね。」

鏡子くんの解説では、これだけインターネットが普及した今でも、小さい会社などでは、会社情報を公開しないことはよくあるそうだ。この会社の規模が大きい小さいかは、今日初めて耳にした会社だけに、さすがの俺にもわかるはずもない。

「そういうことなら、とりあえず別の路線で当たってみますね。」

そう告げると、彼女のメガネの奥にある瞳が、たくましくて力強く輝きだした。

この世のものとは思えないキーパンチで、彼女はパソコンを自在に操っている。まるで、何かが乗り移ったかのように。

声を掛けにくいそんな彼女を横目に、俺は自らのデスクに疲れ切った体を預けた。そして、リクライニングした椅子に深くもたれかかって、おもむろにタバコを吹かし始める。

「ふうー・・・。」

事務所という名の俺の城で、のんびり吸うタバコはまた格別だ。

屋外や人の家で吸うタバコは、そこに飽和している儚さや悲しさも一緒に吸い込んでしまう。ここ東京という街は、いつもそんな物悲しい空気ばかりが覆いつくし、幸せや明るさという感情をかき消してしまっている。

俺はそんな殺伐とした東京という街で、日夜探偵業に勤しんでいるのである。

ちょうどタバコを一本吸い終えた頃、熱中していた鏡子くんから何かを見つけたサインが送られた。

俺はタバコを灰皿に押し付けると、素早く彼女のデスクまで駆けつける。

「何か見つかったか？」

「はい。あまり詳しくはありませんが、ある掲示板サイトであろうやぐエドワールドという名称を見つけました。ここの部分です。」

彼女はマウスカーソルを動かして、エドワールドの文字を指し示した。

この先にもまだページが続くと聞いた俺は、先に進むよう指示すると、彼女はマウスクリックで次なるページへと進んだ。

「ん、どれどれ？」

俺は掲示板に書かれた記事を目で追っていく。鏡子くんは補足するように、その概要だけを声で変換してくれた。

「この雰囲気からすると、エドワールドの元社員が入力したみたい

ですね。かなり悪態付いている文章になっています。」

掲示板をよく見ると、確かにエドワールドに対する誹謗中傷なコメントが目一杯書き込まれている。

書き込み主は、エドワールドに恨みを持つ元社員らしく、誰かに訴えるような、この会社への不平不満ばかりが綴ってあった。

一通り読み終えた鏡子くんは、肩を叩く仕草をしてお疲れな顔を見せている。

「残念ですが、会社についての詳細までは書いていませんね。やはり、もつと粘り強くサーチする必要がありますね。」

彼女が腕まくりして、再検索をしようとした瞬間だった。俺の目に、掲示板に書かれた一つのキーワードが飛び込んだ。

「待て！」

鏡子くんはびっくりしながら俺を見返した。

「これを見てくれ。ここだ。」

俺はそのキーワードを、パソコンのディスプレイ上でタッチして示した。

「・・・カワウチヨシロウ。文章を辿ると、エドワールドの社長のお名前みたいです。でも、これがどうかしました？」

彼女の机に置いてあるメモ用紙に、俺はそのキーワードを書き込んだ。

「川内義郎。この名字の方なんだが、君は今、カワウチと呼んだ。まあ、それが普通の呼び方だろう。」

鏡子くんは不思議そうな顔をして、俺の言っている意図が理解できない様子だ。

「実はね、この川内という漢字の呼び方はカワウチだけじゃないんだよ。」

「え？それはいったい、どういうことです？」

俺は事務所の書棚から、B四タイプの厚めな本を抜き取った。

「あら、それは日本地図帳ですね？」

俺はその日本地図帳をパラパラとめくり、ある都道府県を写した

ページを彼女に見せた。

「これは鹿児島ですよ。」

「そうだ。鏡子くん、ここを見てください。」

俺は鹿児島のある都市名に指を置いた。そこには漢字で“川内市”と記されている。

「この字のフリガナを見てください。」

「は、はい……。」

そのフリガナの正体を知るや否や、鏡子くんは驚きのあまり愕然としていた。

「センダイ！？この漢字でセンダイって読むんですか？」

「ああ。これは“カワウチ”ではなく“センダイ”と読むんだ。地方特有の当て字かも知れないが、実際に実用化されている読み方なんだ。」

鏡子くんは、まるで鳩が豆鉄砲食らったような顔をしている。さすがに博学な彼女でも、この事実にはびっくりしていたようだ。

「つまり、この掲示板に書かれていた“川内義郎”の名字、これがカワウチではなく、センダイとしたら？」

「だとしたら……？」

俺に答えを求めるように、そう問い返してきた鏡子くん。

「おいおい鏡子くん、もう忘れたのかい？例のメールの宛先だよ。」

「あっ！」

どうやら鏡子くんは、俺の言わんとしていることを悟ったようだ。

「sendaiとセンダイ……ですね。そうか、加奈さんの母親がメールした相手は、sendai……つまり、エドワールド社長の川内義郎、というわけですね。」

俺は自信満々に大きくうなずいた。

「そうだ。俺が推測するに、その可能性が高いだろう。鏡子くんはとりあえず、その線で当たってみてくれないか？」

「はい。かしこまりました。」

鏡子くんはやる気満々で、パソコンのキーボードを叩き始めた。

それを見ていた俺も、やるべき仕事に取り掛かることにした。

時計の針はすっかり夕方を示している。そろそろ、渋谷ラッキースターの潜伏する代々木へ向かう時間である。

「鏡子くん、俺はこれから代々木へ行ってくる。何かあったら電話してくれ。」

「はい、いつてらっしゃい。」

熱心に取り込む彼女に送り出されて、俺はキーを叩く音がこだまする事務所を出て行った。

* * *

時刻は午後七時過ぎである。

俺は賑やかな新宿の街を潜り抜け、暗闇に包まれた代々木公園までやってきた。

薄暗い街灯に照らされた公園内では、散歩やジョギングする人、愛を語り合うカップル達がわずかに見受けられた。しかし、至る方向へ目を向けてみても、チームらしき若者の姿はどこにも見当たらない。

俺はくたびれる覚悟を決めて、ここ代々木公園を歩き回りながら、渋谷ラッキースターを搜索することにした。

それにしても、代々木公園はとんでもなく広い。

昔のことだが、浮気調査でここに張り込んだことがあった。そのときの対象者が、この公園を浮気相手との待ち合わせに利用していたからだ。

これがまた困ったことに、対象者が気紛れな性格のようで、浮気相手と接触する場所をコロコロと変えていたのだ。だから俺もその都度、この公園内をうんざりするほど歩き回ったというわけだ。

「ふう、どこにもいないな・・・。」

このままではいつ見つかるかわからない。らちがあかないと見限った俺は、道行く人に尋ねてみることにした。

「すみません。この公園で若者の集団を見かけませんでした?」

「いや、知らないね。」

「見てませんけど……。」

「若者？老人の団体ならそっちにいたけどね。」

残念ながら、有力な情報は手に入らなかった。時間が時間だけに通行人も少なく、この暗さで視界が悪いのも原因の一つだった。

街灯はあるものの、公園内は不気味なまでに真っ暗な闇に覆われている。だが、これしきのことで諦めるわけにはいかない。

何としてもヤツらと接触して、重要な情報を聞き出さなければ、調査そのものが進展しないことになってしまう。

「仕方がない。もう少し自分の足で踏ん張るとするか。」

俺は気持ちを奮い起こし、繰り返し公園内を歩き続ける。しかし、チームらしい若者の姿はどこにもなかった。

まさか、あの衣料品店のアルバイトの話がガセネタだったのだろうか？いや、それは信じたくはない。

友人を殺された悔しさと憎しみに満ちていたあの表情、あの若者が嘘をつくとはどうしても思えない。俺はそう信じて、公園内をひたすら捜し回った。

「さすがに疲れたな……。」

俺は一息つこうとベンチに腰掛けて、最後の一本となったタバコを口にくわえた。

「くそ、今日は出てきてくれないのか！」

俺は焦れるように、空になったタバコの箱を握りつぶすと、その空箱を近くのゴミ箱へと投げ捨てた。

「ん……？」

そのとき、遠巻きながらも、数人の若者達が俺の視界に飛び込んだ。

目を凝らしてみると、つばのある帽子をかぶり、ぶかぶかなトレーナーに半ズボン、そしてハイカットのシューズを身に付けた若者達のような。その見た目からして、渋谷ラッキースターのメンバーに間違いないだろう。

俺はくわえたタバコをポケットにしまうと、一目散にその集団のもとへと駆け出した。その群れをよく観察すると、六人ほどの男達が輪になってしゃがみ込んでいる。

ダッシュで走ってくる俺に気付いた連中が、勢いよく立ち上がり警戒態勢に入ったので、俺は連中より少し間隔を空けて足を止めた。

「はあ、はあ・・・。」

慌てて走ってきたせいもあって、俺は激しい息切れに見舞われていた。

「な、なんだコイツ・・・。」

連中は不審者を見るような目で、呼吸を荒くしている俺を見据えている。

「お、俺は怪しい者じゃない・・・。君達、渋谷ラッキースターだろ？折り返って、君達に聞きたいことがあるんだ。」

「なに・・・？」

若者達は警戒を解こうとはしない。この俺が、警察関係の人間ではないかと疑っているのかも知れない。

「心配するな。俺は警察じゃない、私立探偵だ。この前、渋谷で殺された君達の仲間について聞きたいだけだ。」

連中は互いに戸惑う顔を見合わせている。だが、俺の説得をもつてしても、彼らは口を利いてくれようとはしなかった。

「本当だ、信じてくれ。俺は中谷晋一郎の事件の真相を追っているんだ。協力してくれないか？」

ざわつき始めるチーマー達。俺の言葉に少しばかり動揺している様子だ。

「どうかしたのか？」

突如、俺の背後から落ち着き払った声が聞こえた。

俺はすかさず後ろに振り向くと、そこには、連中とまったく同じような格好をした一人の若者が立っていた。しかし、他の連中に比べると、漂わす雰囲気貫禄のようなものを感じた。

その男は凄むように、俺に凍てつくような視線を浴びせている。

「何だあ？てめえ、警察か？」

俺のことをなめるようににらみつけると、その男は攻撃的な口調で威嚇してきた。

さっきまでの連中が、この男の背後に隠れるように身を潜めたところを見ると、この男がチームのリーダーなのかも知れない。

「俺は私立探偵だ。君達のメンバーだった中谷のことで聞きたいことがあるんだ。」

「ああ、探偵だあ？」

リーダーは怒りの形相のまま、俺から目を逸らそうとはしない。俺も負けじと、その突き刺さる視線をしっかりと受け止める。

にらみ合うこと数秒。その短いようで長い心理戦に勝ったのは、何を隠そう俺の方だった。

「・・・で、聞きたいことっていうのは、どんなことだ？」

リーダーはふと俺から目を逸らし、俺の質問を受け入れる姿勢を取ってくれた。

リーダーのその急変に、背後にいるメンバー達は慌しく騒ぎ出した。

「恭介さん、何言ってるんすか！？まだ正体もハッキリしてないのに。」

「

「そうっすよ！コイツはどうせ、サツの差し金に決まってんすから

！」

リーダーはそのざわつきを一喝でかき消した。

「うるせえ！おまえらは黙ってる！」

この男が放つ存在感は計り知れないものがある。俺はただ、彼の轟音のような怒号に圧倒されてしまっていた。

「俺はラッキースターのリーダー、橋本恭介だ。あんたは？」

俺は自己紹介がてら、リーダーの橋本に名刺を手渡した。

「私立探偵の藪鬼寛樹だ。でもなぜ、俺のことを信用してくれたんだ？」

橋本は緊張を解くように表情を緩める。

「へへ、簡単なことさ。サツが名乗るとき、間違っても探偵なんて言わねえしな。それにあんたの目、めっちゃめっちゃいいガン飛ばしてきやがった。」

こう見えても、俺だっていくつもの修羅場を潜り抜けてきた男だ。依頼解決のために、相手がチーマーだろが、極道だろうが、逃げることなく対峙してきた実績がある。

まあ、たまには恐怖のあまり、両足をガタガタと震わせて、許しを請うこともないとは言えないが・・・。

「俺のにらみに耐え抜いたってことは、よほど度胸が据わってる。つまりあんたが、それだけただ者じゃねーってことだよ。」

この橋本という男、この冷静な判断力といい、この物怖じしない態度といい、若いながらもなかなかの猛者のようだ。

「それで何が知りたい？知ってることなら教えてやってもいいぜ。」

俺はその言葉に甘んじて、遠慮なく質問をぶつけることにした。

「俺は今、失踪人の搜索をしている。名前は大林加奈。彼女の失踪に、どうも君達のメンバーだった中谷晋一郎が関わっていたようなんだ。」

俺は加奈の写真を橋本に差し出した。

「この写真の娘が大林加奈だ。見覚えとか、心当たりはないかな？」

橋本は首をひねりながら、写真をじっくり見つめた。公園内の薄暗い照明の下では、さぞ見難いことであろう。

「俺は見たことねえな。おい、おまえらは知ってるか？中谷の女について、知ってるヤツはいないか？」

橋本の計らいで、他のメンバー達が加奈の写真を回覧していくも、その写真を眺めては、メンバー一人一人首を横に振っていた。

「・・・あれ？」

メンバー最後の一人が、加奈の写真を食い入るように見つめている。それに気付いた橋本がすぐさま声を掛けた。

「おい、おまえこの女のこと知ってるのか？」

「あ、はい。確かにこの女、中谷さんと一緒にいましたよ。見かけ

たの、俺が中谷さんに頼まれて、ハンバーガーを届けたときだったかなあ……。」

俺はもつと詳しく聞こうと、そのメンバーの側へと駆け寄った。「すまない、もう少しその日のことを細かく教えてくれ。」

そのメンバーは、リーダーである橋本に目配せしている。橋本が大きくうなずくと、メンバーはその日のことを語り始めた。

「あれは中谷さんが殺された前日、だから五日ぐらい前かな？あの日、夜七時過ぎぐらいに、中谷さんから電話があつたんすよ。」

そのメンバーはその電話で、ハンバーガーとドリンクを二個ずつ買ってくるよう中谷に指示されたという。

「それで俺、中谷さんのところに買った物を持っていったんすよ。そうしたら、そこに中谷さんの他に、この写真の女もいたんです。

間違いないっすよ。確かにこの女でした。」

「その中谷がいた場所っていうのはどこなんだ？」

「恵比寿の工場跡地です。」

俺はシステム手帳を取り出すなり、そのメンバーにペンと一緒に手渡した。

「すまないが、その場所の簡単な地図を書いてくれないか。」

そのメンバーは照明の下まで移動して、工場跡地までの道のりがわかる大まかな地図を書いてくれた。

その地図、そしてメンバーの話から、その工場跡地はJR恵比寿駅から歩いて四十分ほど先にあることがわかった。

「あと、他に何か知ってるヤツいねえか？」

橋本がメンバー全員に問いかけてみたが、どうやら、彼らから聞ける情報はこれぐらいのようだ。

「どうもありがとう。助かったよ。」

俺は頭を下ろして、渋谷ラッキースターのメンバー達に感謝の意を示した。

「そうそう、探偵さん、ちょっといいか？」

この場から離れようとした俺に、リーダーの橋本が声を掛けてき

た。

彼は俺の側まで近寄ると、おもむろにポケットから携帯電話を取り出した。

「これ見てくれ。」

「ん？」

橋本の手にある携帯電話の液晶画面には、受信メールの一覧が表示されている。彼が引き続き操作していくと、一通の受信メールに辿り着いた。

「このメールさ、実はついさっき届いたメールなんだ。驚いたことに、このメールの送信相手、殺された中谷なんだ。」

「何だと!？」

俺はそんなバカな!と言わんばかりに、橋本から携帯電話を奪い取った。

四日前に死んだ人間がメールなど送れるはずがない。俺は奪い取った携帯電話の液晶画面に釘付けになった。

「ん、このメール・・・。」

「おう、気付いたか? そうだ。送信日時はヤツが殺された日時なんだ。つまり、メールが遅れて受信されたってわけさ。」

俺はその事実思わず胸を撫で下ろした。

橋本の話によると、ちょうど一週間ほど前、携帯電話の調子が悪く、販売店へ修理に預けていたらしい。

修理から戻ってきたのはいいが、それでもどうも具合が悪いようで、メールが遅れて届いてしまったのでは? とのことだった。

「おいおい、脅かすなよ。」

「わりい、わりい。それよりな、気になるのはそんなことじゃなく、メールの本文なんだ。」

橋本は携帯電話を操作して、そのメールの本文を液晶画面に表示させた。そのメールの本文には、たった一言“インカンに”とだけ書かれていた。

「インカンに・・・? まさかこれ、中谷からのダイイングメッセージ

ジか？」

「何だよ、そのダイイングメッセージってのは？」

「死ぬ間際に被害者が残した、犯人を指し示すメッセージのことだ。つまりインカンという文字に、犯人を特定できる何かが含まれているのかも知れない。」

このメッセージに心当たりがないか橋本に尋ねてみると、彼は困った顔のまま大きく首を横に振った。

「いや知らねえ。これって何かの暗号みたいだよな。」

橋本の携帯電話に辿り着いた“インカンに”というメッセージ。

俺は漏らすことなく、システム手帳にしっかりと書き込んだ。

「橋本、俺はこれから恵比寿へ行く。もしインカンについて何かわかったら、俺まで連絡をくれ。」

俺はそついい伝えると、渋谷ラッキースター一同にもう一度別れを告げた。

代々木公園を後にした俺は、加奈に遭えることを信じて、立ち止まることなくまっすぐに恵比寿へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4906y/>

藪鬼探偵事務所

2011年11月21日17時25分発行